

日本武道学会剣道専門分科会報

ESPRIT

2019

剣道専門分科会 会長挨拶

湯浅 晃

平成30年度 日本武道学会剣道専門分科会研究会

術語「budo」「bujutsu」について考える

—Donn. F. Draeger の著述・修行を手がかりとして—

コーディネーター 長尾 進 (明治大学教授)

Phil Relnick (香取神道流指導者免許, 杖道教士七段, 米国)

Liam Keeley (立身流兵法 奥伝目録, オーストラリア)

Hunter B. Armstrong (Director, International Hopology Society)

コメンテーター 酒井 利信 (筑波大学体育系教授)

コメンテーター Alexander Bennett (関西大学教授)

特別企画

最新若手研究者の動向

廣野 準一 (信州大学総合人間科学系講師)

事業報告

会計報告

事務局便り

Division of KENDO, Japanese Academy of BUDO
日本武道学会剣道専門分科会

目次

挨拶	・・・	1
剣道専門分科会 会長 湯浅 晃 (天理大学 名誉教授)		
平成30年度日本武道学会剣道専門分科会研究会	・・・	3
術語「budo」「bujutsu」について考える		
－Donn. F. Draeger の著述・修行を手がかりとして－		
コーディネーター		
長尾 進 (明治大学教授)		
パネリスト		
Phil Relnick (香取神道流指導者免許, 杖道教士七段, 米国)		
Liam Keeley (立身流兵法 奥伝目録, オーストラリア)		
Hunter B. Armstrong (Director, International Hopyology Society)		
コメンテーター		
酒井 利信 (筑波大学体育系教授)		
Alexander Bennett (関西大学教授)		
特別企画 最新若手研究の動向	・・・	21
廣野準一 (信州大学総合人間科学系講師)		
平成30年度剣道専門分科会 事業報告	・・・	30
平成30年度剣道専門分科会 一般会計決算書		
特別会計決算		
令和元年度剣道専門分科会 事業計画	・・・	34
令和元年度剣道専門分科会 一般会計予算書		
事務局便り	・・・	36



挨拶

剣道専門分科会 会長

湯浅 晃

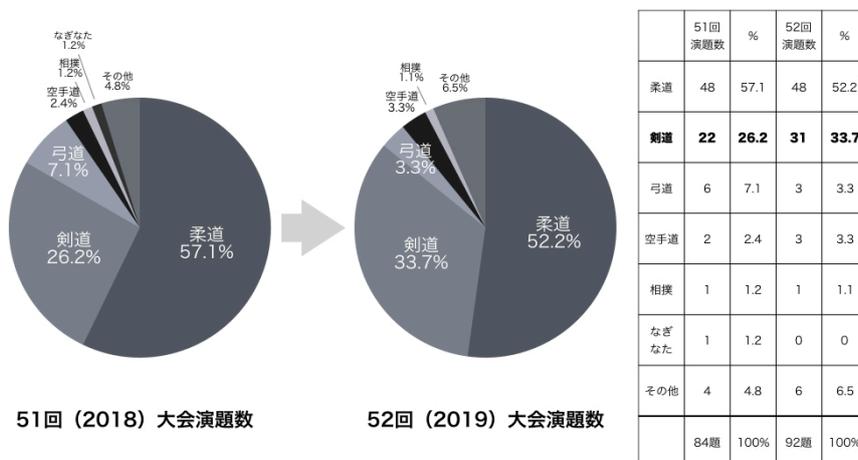
先般、9月5日～6日の2日間にわたって、日本武道学会第52回大会が國學院大學・横浜たまプラーザキャンパスにて開催され、昨年(2018)の84題を超える92題の研究発表が行われ、フロアとの質疑応答も活発に行われました。昨年(2018)の本誌“Esprit2018”において、私は剣道専門分科会会員による研究発表が低調であったこと、とりわけ人文・社会系以外の自然科学系、武道指導法系、ポスター発表の発表について柔道との差が大きいことを指摘させていただき、本会会員諸兄に対しまして奮闘をお願いしたところ(2018)です。そこで、本誌巻頭のご挨拶にかえて前大会との比

較から今大会における研究発表の動向の報告と、私なりの感想を述べさせていただきますと思います。

今大会の発表演題数について集計したのが図表1(全演題)と図表2(分野別)です(本会事務局・齋藤実氏作成)。発表全演題中の剣道関係(剣道専門分科会会員による武道史関係の研究を含む)演題数の割合は、前回の22演題(26.2%)から31演題(33.7%)と増加しております。この点につきましては、会員諸兄のご努力に対しまして感謝申し上げます。また、図表1、図表2からは明らか

前大会の演題数と比較しますと、表3のようになります。

この表3からわかることは、人文・社会系とポスター発表の演題数においては、ほぼ前年と同じ水準ですが、自然科学系においては減少傾向にあります。これに対して、武道指導法系においては今年度大幅に演題数が増加しています。このような傾向は、発表者自身が発表分野を選択していることにも起因するものと思われます。実際、武道指導法系の発表の中には自然科学的な研究方法によるものが散見されるからです。したがって、自然科学系と武道指導法系の発表を合計すると、今年度は



図表1) 日本武道学会51、52回大会演題数の割合(全演題)

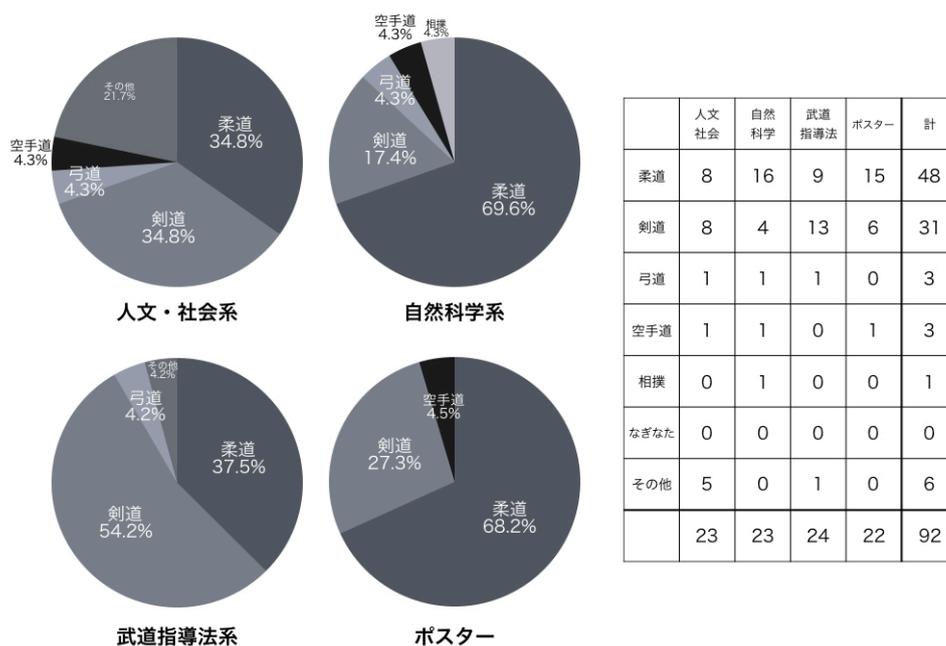
増加傾向にあったと言ってもよいでしょう。

次に、今回の発表テーマや研究方法に関して気がついたことについて触れてみたいと思います。自然科学系、武道指導法系の発表においては、競技者のパフォーマンスの向上に直接的に役立つテーマを採り上げたもの、また、その研究方法として被検者（競技者）や判定者の主観を含めたデータを扱ったものがみられました。それらの発表を視聴して感じたことは、研究者自身が競技者の立場に立って、現実の試合の中で勝つためにはどのような技術や戦術が有効なのかという、競技者としての切実な思いが研究のテーマや方法の設定の根幹にあるということです。例を挙げれば、分析の対象者を一流選手とした研究、試合に勝

つためにはフェイント動作が重要であるとの立場からの研究テーマなど、大変興味深いものがありました。ただ、研究の方法論についてはもう少し吟味する必要があるのではないかと感じました。この点については、打突の主観的速さをテーマとした研究において、フロアから「相手が近づいてくると相手の姿が大きく見える」という距離と視覚の関係という心理学的な分析方法を採り入れるべきであるとの有意義なサジェスションもありました。

そもそも、スポーツにおける運動、とくに対人競技としての武道において競技者自身の競技力の向上や、その指導の現場において、有効な技術や戦術・戦略や指導方法は、純粋な自然科学の方法論では解明できないのではないか。

「自分」という〈主体〉そのもの、あるいは自分という〈主体〉からみる・みえる「相手」を対象とする私達の研究において、どのような研究テーマを設定し、どのような研究方法を採用するのかについても、競技者であり研究者でもある私達が集って、真剣に議論していく必要があるのではないのでしょうか。みんなで知恵を出し合いましょう。



図表2) 日本武道学会52回大会演題数の割合（分野別）

表3) 分野別演題数（剣道専門分科会）の年次比較

	人文・社会	自然科学	武道指導法	ポスター	合計
第51大会	6(27.3%)	6(27.3%)	5(22.7%)	5(22.7%)	22
第52大会	8(25.8%)	4(12.9%)	13(41.9%)	6(19.4%)	31

平成30年度 日本武道学会剣道専門分科会研究会

術語 「budo」 「bujutsu」 について考える

—Donn. F. Draeger の著述・修行を手がかりとして—

コーディネーター：長尾 進 氏（剣道専門分科会副会長／明治大学教授）

パネリスト：Mr. Phil Relnick（香取神道流指導者免許，杖道教士七段，米国）

Mr. Liam Keeley（立身流兵法 奥伝目録，オーストラリア）

Mr. Hunter B. Armstrong（Director, International Hoplology Society）

コメンテーター：酒井 利信 氏（筑波大学体育系教授）

Alexander Bennett 氏（関西大学教授）

日時：平成 31年 3月23日（土） 15：30～17：30

会場：明治大学 中野キャンパス 307教室

1. イントロダクション

【長尾】

このフォーラムのコーディネーターの長尾でございます。年度末にもかかわらず、多くの皆さまにお集まりいただき御礼申し上げます。

日本武道学会剣道専門分科会との連動企画としてこのフォーラムを開催できますことは、私にとりまして大きな喜びであります。日本武道学会では過去の国際シンポジウムにおいて、「budo」と「martial arts」の共通点や相違点について議論を重ねてきました。けれどもなかなか見解の一致をみることはできませんでした。それは我々が近代の武道を、武術よりも上位に置くことに慣らされてきたことも、その要因の1つかもしれません。そういう中で私は Draeger（ドレーガー）さんの著作に出会いました。ここに代表的

な3冊がありますが、「*Classical Bujutsu*」、「*Classical Budo*」、そして「*Modern Bujutsu & Budo*」というものです。このほかにも Draeger さんにはいっぱい著作があるのですが、Draeger さんは武道と武術について厳密に区分されておられますけれども、どちらも大事なものとして捉えています。「*Classical Budo*」においては「兵法」、いわゆる兵（つわもの）の法ではなく、中條流や神道流に見られる「平法」に武道の意義を見いだしておられます。その一方で「*Classical Bujutsu*」の中では、室町時代以来連綿と極力原形を変えずに続いてきている「武術」にも大きな価値を見いだしています。

このフォーラムには3名の素晴らしいパネリストに来ていただいております。3先生は皆さん Draeger さんと共に、現代武道や

古流武術を修行し研究された方です。

最初に Phil Relnick（フィリップ・レルネック）先生をご紹介します。先生は Draeger 先生と共にいろんな武術を20年間修行されました。天真正伝香取神道流の免許を持つ指導者であり、米国のワシントン州で道場を持たれていま



す。Relnick先生のお話を聞くことによって、皆さんはDraegerさんの人生、人となり、およびその業績を知ることができるでしょう。

次にLiam Keeley (リアム・キリー) 先生をご紹介します。先生は立身流兵法の奥伝目録で、現在はメルボルンにお住まいです。Draegerさんとは東南アジアの武術についてフィールド・リサーチを行われました。また南アフリカに留学されました時には、ズルー族の棒術も学んでおられます。皆さんは先生のお話から、Draegerさんのフィールド・リサーチと、特にそのアプローチの仕方について学ぶことができるでしょう。

そして最後にHunter B. Armstrong (ハンター・アームストロング) 先生。先生はお若いときから空手に親しまれておりましたが、Draegerさんと出会ってからは新陰流兵法や、尾張貫流槍術を初め多くの古流武術を修行されました。Draegerさんと共に、hopology (ホプロロジー) というのは「武器学」とかよく訳されますけれども、International

Hoplology Societyの創設当初からのメンバーで、現在は同SocietyのDirectorを務めておられます。日本のみならず、東南アジアの多くの国の伝統武術、現代武術の両方を詳しく調査されました。皆さんは先生のお話から、Draegerさんの武術や武道についての考えを知ることができるでしょう。

そしてコメンテーターの先生方をご紹介します。まず酒井利信 (さかい・としのぶ) 先生。先生は筑波大学教授で剣道教士七段です。剣道・武道に関する著作が多くあり、ルーマニア剣道代表チームのコーチでもあります。

そしてAlexander Bennett (アレキサンダー・ベネット) 先生。先生は関西大学の教授で、剣道教士七段を初め、多くの武道の有段者です。ニュージーランド剣道代表チームのヘッドコーチでもあります。著作も多く、英語剣道誌 *KENDO WORLD* の主筆でもあります。

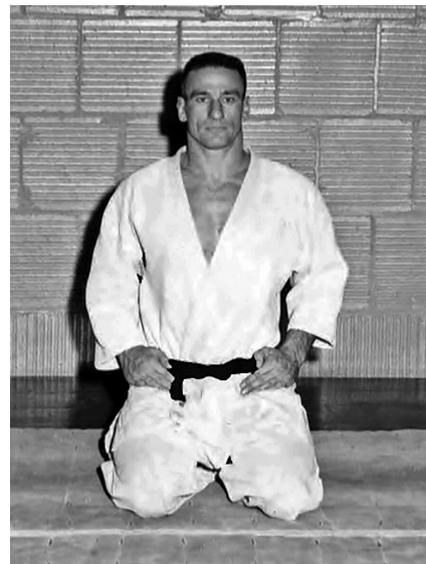
最後にトニー (アントニー) ・カンディさんをご紹介します。カンディさんは3パネリストの先生方と綿密な連絡をとっていただい

て、この実現に本当にご協力いただきました。映画とかドラマで有名な「子連れ狼」で、あの拝一刀がやっていた水鷗流居合をやっておられます。

少し私のイントロダクションが長くなってしまいましたけど、では最初に、早速Phil Relnick先生からお願いします。お1人20分ずつでお願いしております。

Donn F. Draeger (ドン・F・ドレーガー) について

Donn F. Draeger (ドン・F・ドレーガー 1922-1982)。米国・ミルウォーキー生まれ。少年期より、jujutsu・judoに親しむ。1943年から1956年まで米国海兵隊に所属。1961年の全日本柔道選手権で英国人John Cornishとともに投げの形を披露。1964年東京オリンピックでの武道デモンストレーション剣道の部において、清水隆次範士とともに神道夢想流杖道の形を披露。その後も日本に長期滞在し、神道夢想流杖道や天真正伝香取神道流をはじめ、多くの古流武術・現代武道の実践と研究を行い(日本古



Donn. F. Draeger (Hunter Armstrong 氏提供)

武道振興会に所属)、免許もしくは高段位を得る。

bujutsu・budoに関する著作多数。*Martial Arts and Ways of Japan* (3部作) が代表作。martial arts に対して“martial ways”という概念を用いた。後年は主に東南アジアの武術に関心をひろめ、ホプロロジー(hoplology)の基礎を築く。

2. プレゼンテーション

【Phil Relnick 氏】

本日はお招きいただきありがとうございます。我々3人にDonn, F. Draegerとの思い出を語る機会を用意して下さったフォーラム関係者の皆さんに感謝申し上げます。特に、Donnの人生最後の20年間に彼から大きな影響を受けた私にとって、今日というこの機会は非常に重要なものです。彼とは多くの時間をともにしました。彼が優れた武道家であったことを皆さんにお伝えすることがなよりの恩返しだと思っています。

Donnが日本を後にする日、私は成田空港まで見送りに行きました。ともに修行を行ううちに、彼は私の友となり、martial artsの

先達、指導者、そしておじのような存在、手本となる人、人生の師となりました。彼から多くのことを学んだおかげで、今日の私があります。はっきり言って、私は彼の「金魚のフン」でした。(笑)ではDonnの話をしてしまおう。本当は詳しくお話したいのですが、時間が限られているため、短い説明になることをご理解ください。まず、Donnは1922年4月15日にアメリカのウィスコンシンで生まれ、1982年10月20日にがんのため残念ながら60歳で亡くなりました。1970年代にmartial artsのフィールドワークでインドネシアのジャングルに滞在した際に、病に感染したのではないとも言われています。確かではありませんが、真実を知ることはもうありません。

インドネシアから戻った後、Donnは成田で地元の医者に診てもらいましたが、体の不調の原因がただの胃のむかつきでないと自ら認めたのはたいぶ経ってからでした。約6カ月後、彼は退役軍人健康保険の使えるハワイのトリプラー陸軍病院でどのような治療が受けられるか確認しに行くと私に告げました。ハワイに向かう準備

をする間、日本に戻ってこれない場合に備えて、Donnは私を遺言執行人に指定しました。その中には未完の仕事をすべて処理することも含まれていました。私はその役目を引き受け、実際に役目を果たすことになりました。

日づけは思い出せませんが、夕方Donnを成田空港に送っていき、できるだけ空港の奥まで付き添うしかできなかったのは、それまでで最も悲しい出来事でした。おそらくこれが最後の別れになるとお互いにわかっていました。ハワイでは、martial artsの古くからの仲間であるQuintin ChambersがDonnの到着を待っていました。QuintinがDonnを空港からトリプラー陸軍病院へ送ってくれました。トリプラーではもう何の治療も施せないとわかると、Donnは母親の住むウィスコンシンに移され、そこで4か月ほど過ごした後、ホスピスに入り、そこで亡くなりました。

Donnの弟のGaryによると、Donnは成長するにつれ学校で優れた運動能力を発揮したそうです。まだ子供のころ、おそらく隣人であった日本人男性から柔道あるいは柔術を教わりました。この



幼いころに得たmartial artsの経験が、彼の将来のキャリアを築く礎となったのでしょう。

その後、Donnは重量挙げの選手とボディービルダーになり、最終的に背は185センチまで伸びました。体重は90キロありました。筋骨隆々でしなやかな肉体でした。それに、煙草も吸わず、酒も飲みませんでした。後年、Donnは近代的な重量挙げの方法を将来有望な日本の柔道家たちに紹介し、彼らの技術は非常に伸びました。その例が60年代半ばに国内および国際大会で優勝して名をはせた猪熊功や、世界で最も有名な外国人柔道家であるオランダ人のアントン・ヘーシンクです。Donnは大学2年生のときに、Pearl Harbor Avengersと呼ばれる潜水艦の乗組員としてアメリカ海兵隊に入隊しました。偶然にも入隊日は真珠湾攻撃からちょうど1年目の1942年12月7日（真珠湾攻撃は、ハワイ時間では12月7日）でした。Garyによると、Donnは海兵隊にいる間に大学の教育を終えたそうです。戦時中の一時期、彼は中国で任務に就きました。後に、朝鮮戦争にも従軍し、戦時には少佐まで階級が上がりましたが、除隊時の恒久的階級は大尉に下がっていました。でもそれは、当時としては普通のことでした。

Donnのことはよく知っていました。彼に初めて会ったのは1961年でしたが、私が日本でのように柔道の修行を行っていけばよいかについて1959年から1961年にかけて彼に相談していました。私が日本に行くのは、それが2度目でした。アメリカ空軍の一員として日本に駐在した1956年から1958年が1度目で

もちろんDonnは当時の私を知りませんでした。すでに私のような人たちの手助けをしていたので、私にも正しい道筋をつけてくれました。それで私は現在に至っているのです。

Donnは非常に控えめな人でした。自分の思いは胸に秘めていました。自分が達成した偉業について語ることはなく、口数が多いときでさえも偉業について話す気になってもらうのは一苦勞でした。それは一番身近な外国人の修行仲間であり弟子である私にも難しいことでした。言えるのは、最初は柔道、次に他のmartial artsへの貢献を通じて、スポットライトを浴びる機会が頻繁にあったにもかかわらず、彼はそのような機会を避けていたということです。地元での道場の友人や修行仲間に対してだけではありません。Martial artsに関するすばらしい著作を数多く出し世界のmartial arts界で脚光を浴びる機会が増えていったにもかかわらず、彼は注目されることを避けていました。

Donnは裕福だったわけではありません。彼は、部分的な軍人恩給、英語の教師の職、大した額ではないと思われる著作の収入で生計を立てていました。かなり質素な生活を送り、畳敷きの小さなアパートに住んでいました。

話をしているときのDonnは自信に満ちていました。Martial artsについて話すときは特にそうでした。とはいえ、横柄だったわけではありません。彼には何か特別なものがあつたのです。教養があつただけでなく、彼にはカリスマ性がありました。人々は彼の話に耳を傾けました。私自身は、彼の中にかつての海兵隊の将校の姿を見ていました。大げさに言っ

ているように思われるかもしれませんが、日本の武士とぴったり合う人物がいるとすればそれは彼です。もちろん、週末だけの一時的な兵士ではありません。戦争を経験した海兵隊員であり、1日24時間、週7日、兵士でした。演じていたのではなく、それが本当の彼であり、我々が目にし、尊敬する彼でした。

Donnは道場の中でも外でも礼儀を重んじ、武具を用いるものと用いないものの両方の格闘技術を高め、我々のような若い修行者がよく無視するような些細なことも決して見逃すことはありませんでした。彼はMartial artsの格闘技術について語ることはありませんでした。その必要はなかったのです。2・3時間の稽古が終わって我々に余力があれば、しばらく自由に稽古をして、そのときに彼が格闘技術を見せてくれたからです。

Donnは自分の稽古はもちろん、後輩の稽古にも厳しい人でした。しかし、ときには冗談を口に、私たちよりもたくさん際どい話を知っていました。本人によると、第二次世界大戦後、一時期、日本駐在となり、そこから朝鮮戦



争に従軍し、その後キューバと南アメリカでの任務に赴き、最後にアメリカに戻り、除隊まであと5年というときに15年から16年の兵役を終えて海兵隊を去りました。

Donnは当時アメリカに住んでいたかつての全日本柔道選手権優勝者の石川隆彦先生と柔道の修行を続け、また指導にも当たっていました。石川先生はその指導力と指導技術でアメリカの柔道コミュニティでよく知られた存在になっていました。先生は当時のアメリカの柔道家たちの知識と技術の向上に大きく貢献しました。

Donnは1956年に一般人として日本に戻り、講道館で柔道の修行を続け、それまでに見聞きしたことだけはあった日本のほかのmartial artsについてさらに学びました。

ちなみに、60年代に講道館では月例の昇段試験で、修行生たちに「形」の試験を課していました。その際、Donnはカナダ人のHoward Alexanderと「形」を披露するよう頼まれていました。驚いたことに、日本人の指導者に「形」の披露を依頼されることはありませんでした。講道館の指導者たちがDonnを非常に信頼し、尊敬していたということです。

Donnは多くの現代的なmartial artsを研究していましたが、本格的に研究していたのが伝統的なmartial artsである古流武術です。特に関心があったのが、約400年前に創始された神道夢想流杖術と約600年前に創始された香取神道流です。

お若い方はご存知ないかもしれませんが、1950年から60年代の日本では、伝統的な武術の指導者たちは外国人の修行者を受け入

れていませんでした。Donnが我々外国人修行者のために道を切り開いてくれたのです。もし我々が同じように試みたとしても、おそらく追い返されていたでしょう。Donnに会った日本人指導者たちは彼が自分たちと同じ世界に属していることがわかったようで、面会のためだけでも道場に入ることを許しました。

Donnは著作や我々との会話の中で、古流武術（伝統的武術）と現代武道（現代的武術）の違いを明確に定義していました。彼によると、封建時代の終わりまで発展し使用されていた武術は「伝統的武術」と見なします。そして明治維新以降に発展し使用された武術は「現代的武術」と見なします。彼はさらに「現代的武術」の多くは、実のところ「伝統的武術」の現代版であると付け加えました。jutsu（術）ではなくdo（道）という言葉を使い、kyu（級）/dan（段）という制度をもち、教習方法に試合を含む武術の流派は、現代的武術、あるいは剣道、柔道、合気道、空手などと類似の「競技」と考えるべきだとも言うていました。

この問題についてDonnは、自身の著作はmartial arts について英語で書かれた本の最初の世代なので、きっと研究のなかには間違いもあるだろうと何度も私に話していました。次世代の熱心なmartial artistsである我々に、必要な訂正をしてほしいとも言っていました。Donn、きっとあなたの期待にこたえます。

Donnはアメリカを初め、世界中の国々で柔道の発展に大きく貢献しただけでなく、1966年にはアメリカやマレーシア、オーストラリア、ヨーロッパ諸国が加盟す

るInternational Jodo Federationを設立しました。また、International Hoplology Research Centerという組織も設立しました。これらについては、後ほどほかのパネリストがお話します。

Donnが道場で誤りを犯すこともありました。彼が伝統的な武術流派を訪れたときの話をいくつか聞かせてくれました。とてもユーモラスな話もあれば、非常に恥ずかしい思いをした話もありました。その1つが、よく知られている、長い歴史のある伝統的な武術の道場を訪れたときの話です。その指導者はDonnに流派と武具について説明する中で、Donnに見せたいものがある、家まで取りに行ってくるのでしばらく待っていてほしい、と言いました。指導者を待っている間、Donnは2・3本の六尺棒が壁に立てかけられていて、その隣に棒掛けがあり、いくつか空いていることに気づきました。練習生が棒掛けに戻すのを忘れたのだと思い、練習生のためにも、そして棒がたわまないためにも戻したほうがいいのかと考えました。

指導者は戻ってくるなり、Donnにどうして棒が棒掛けに置かれているのかと尋ねました。Donnは棒がたわむのを見るのは心苦しいので自分が置いたと答えました。すると、それまで笑顔で気さくだった指導者はDonnを冷たく見つめて言いました「これらの棒はこの100年から200年この壁に立てかけられていたのです。棒がたわんでいないのなら、この先もたわむことはありません」。他人の武具に許可なく触ってはいけないという最初の教訓になったとDonnは言っていました。

Donnがどのようにして神道夢想流と香取神道流への入門が許されたのか、と私は何度か尋ねられたことがあります。神道夢想流については、1956年に、Donnのかつての柔道の師であり元警察官の石川隆彦先生が、神道夢想流の師範であり機動隊の杖道師範であった清水隆次先生に推薦状を書いてくれたからです。そしてDonnは入門を認められました。

香取神道流については、1960年代に、清水隆次先生が、香取神道流の師範である大竹利典先生に推薦状を書いてくれたからです。Donnは同様に入門が認められました。ご参考までに、神道夢想流の流祖、夢想権之助勝吉はかつて香取神道流を学んでいました。

1950年代から70年代当時、伝統的武術の日本人指導者が外国人の修行者をいわゆる「先生」と呼ぶのは、不可能ではないにしても、難しいことでした。もっとも、Donn Draegerは別でしたが、きっと指導者たちは、Donnの高度な武術の技術と研究への熱心な姿勢とともに、彼自身のことにも認めようと言ったのだと思います。



最後に、Donnの私生活についてほんの少しだけお話ししたいと思います。正確なところはほとんど知られていません。ほとんどの人はDonnが結婚していたことを知らず、子供がいたということも知らないと思います。弟のGaryによると、Donnは海兵隊員として最初の海外任務を終えて戻ってきてから結婚したそうです。2人目の息子が生まれてまもなく離婚したようです。1人目の息子は幼いころに病気で亡くなりました。私は数年前にDonnの次男に会ったのですが、残念ながら、彼は父親に会った記憶がありませんでした。実際、Donnの息子さんは父親のことを調べていたときに、父親が有名なmartial artsの作家になったことを知り、私の名前を見つけて、私に連絡してきたのです。息子さんは今60代半ばで、彼自身も2人の息子の父親です。けれども残念なことに、誰も日本の武術を経験したことはありませんでした。

以上になりますが、Donnについてお話しできなかったことがいくつもあり申し訳ありませんでした。本日はお話しする機会をいただきありがとうございます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

【長尾】

Relnick先生、本当にいいお話ありがとうございました。続けてLiam Keeley先生のプレゼンテーションにうつりたいと思います。

【Liam Keeley 氏】

本日は、1979年に実施されたIHRC (International Hoplology Research Centre)のマレーシアとインドネシアへの現地調査旅行

についてお話しします。当時、東京でDonn, F. Draegerのもとに集まったのは、Phil Relnick、Larry Bieri、彼の妻のMabuchi Seiko、(Hunter) Chip Armstrong、Meik Skoss、David Hall、そして新入りの私でした。

これは、Donn Draegerが「形」を披露している映像です。これは神道夢想流の杖の「形」です。Draeger はすでに*Weapons and Fighting Arts of Indonesia*と*Pentjak-silat: the Indonesian Fighting Art*、*Javanese Silat: the Fighting Art of Perisai Diri* を出版していました。この映像には、silatに関するその2冊も出てきます。この旅行の本来の目的は、ニアス島へ行くことでした。インドネシアの小さな島です。これはニアス島の有名な通過儀礼で、石の柱を跳び越えます。[映像]

調査チームのメンバーを紹介します。全員は映っていないのですが、左端が常心門空手を創設した池田先生、そして口ひげをはやした私、Meik Skoss、Donn Draegerです。

Donn Draegerの人となりをお伝えしたいと思います。Hoplology (武器学) そのものよりも、彼が薦めてくれた本、彼が称賛していた人々、martial artsの将来について懸念していたことをお話しします。

毎日のルーティンです。彼は57か58歳で、とても元気に見えました。その年齢でも「股割り」ができました。ほとんど毎朝、稽古を行っていました。たぶん神道夢想流の杖を修めていないのは私だけでした。ほかのみんなが杖の稽古をしている間、私は池田先生と空手の「形」を稽古してしまし

た。非常に印象的だったのは、Donn Draegerが熱心に稽古していたことです。称賛に値しました。

どんな稽古だったのか？ 手の込んだものだったと思います。Chip (Hunter Armstrong氏) がとても面白い話をいくつか知っていますので、あえて私からはお話ししません。「形」を披露しあう危険について彼に尋ねてみてください。Draegerがすでに知られている場所では、ずっと簡単でした。人々は彼のことを知っているのです、たいてい、無理をしても手伝ってくれました。例えばペナンでは、彼はすでに神道夢想流杖術の練習グループを指導していたので、いい伝手があり、そこからまた新たな伝手が生まれました。その方法は「あなたの形を見せてくれたら、私の形も見せましょう」でした。

ペナンは非常に面白いところでした。我々は鉄のような手で有名なP'ng Chye Khimに会いました。彼の手は、見た目は普通ですが、よく見ると普通の人より厚くて大きいのです。そして非常に印象的なものを見せてくれました。鉄筋コンクリートの壁があり、そして彼は全身でその壁に突進したのです。まさに見ものでした。もう1人、我々がじっくりと見たのが、Phoenix Eye Fistを教えているLeongという男性でした。

カマキリ。これは面白い形です。彼らの練習場を訪れたときに見ることができました。人に見せることやエンターテインメントを意識したものでした。我々が見たものの多くは、実際、アクロバットやサーカスのような技でした。他にもたくさん形の話を聞きましたが、その中に「カエル」と

いうに水泳に基づいた形がありました。Draegerは魂の憑依に非常に興味を持ち、武道家でない人が憑依によって形を演じたという話をいくつか聞きました。

当時の状況を理解することが重要です。我々が訪れたのは1979年でした。ちょうど10年前、クアラルンプールでは大きな民族間の衝突が発生しました。ペナンでも、1957年、59年、64年、67年に民族間の衝突が起こっています。ですから、人々は異なった方法でmartial artsを練習していたのだと思います。これらの民族間の衝突はまだ人々の記憶に鮮明に残っています。教習場は様々なレベルで機能し、コミュニティー・文化の中心、センター、結集地、応急処置所、武器庫であったことがわかりました。ですので、その場所を単に道場として考えるだけでは十分ではありません。

そこで私が薦めているのが、Clifford Geertz (クリフォード・ギアツ) の「厚い記述」に関連した人類学的な考え方です。つまり、できるだけいろいろな観点から物事を見ようということです。これがアメリカの人類学者、ギアツです。彼は論文「ディープ・プレイヤーの闘鶏に関する覚書一」で有名です。闘鶏に関して彼が提起した多くの点は我々にも関連しています。

マレーシアとインドネシアはまるで違いました。インドネシアに行ったときのほうが、身の危険を感じました。我々は大いに人目をひいていました。カフェに入ると、多くの人たち、特に子供たちが我々をじっと見つめていたのです。それから、ナイフの文化ですが、それについては後ほどお話しします。かなりの人数の警官と軍

人が街のあちこちにおいて、演武を披露しようとするので、警官が干渉してくるので演武を見せるのはかなり難しかったです。公共交通は頼りにならず、それほど安全でもありませんでした。フィリピンやインドネシアに行けば、このような状況はよくわかるでしょう。そして、第三世界特有の衛生面です。トバ湖へ向かうフェリーの船上で、キッチンのすぐ隣にあるトイレが使われるのを目にし、バケツで湖の水を汲んで、その水でお茶を沸かすのを見たときには、気持ちのいいものではありませんでした。

インドネシアで我々がどのように見られていたかということ、かなり疑い深い目で見られていたと思います。我々の髪は短く、健康状態はよく、自信を持って行動していました。我々は兵役に就ける年齢で、リーダーと思われる年上の男性Donn Draegerに従っています。彼らがたどりついた結論は、「アメリカのスパイに違いない」だったでしょう。

我々のことをよく知るようになったガイドは、地元の人間は我々がスパイではないとなかなか信じてくれず、我々の本当の目的



Liam Keeley氏

は何か、動機は何かという推測が盛んに飛びかっている、と認めました。

我々が訪れたのはバタック人が住む地域でした。おもに接したのは、トバ・バタック族とカロ・バタック族です。ご存知の方もいらっしゃるでしょうが、現地調査はやっかいなもので、人類学の知識のある人ならきつとおわかりと思いますが、非常にいら立たしいこともあります。

よい例と悪い例があります。悪い例は、「形」の披露を行おうと1日かけて話し合いをしたあとになって、警察か軍が干渉してきて、「だめだ、それはできない」と言うことです。よい例は、いまでもはっきり覚えています、ある男性に行った聞き取り調査です。（そのときは）彼の練習生は1人しかいませんでしたが、聞き取り調査が進むにつれ、練習生たちがだんだん興味を示し、この指導者を高く評価し始めているのが目に見えてわかったので、silat（シラット）のさまざまな瞑想法や毒の使い方などについて話し始めました。

Draegerが何に関心を持っていたかについてお話しすると申し上げていましたね。彼は攻撃性に強い関心を持っていて、実際にそうでした。例えば、ペナンに滞在中、我々はヘビ園に行き、世界で一番危険なヘビはどれかと尋ねると、マンバだということでした。それで我々はガラスの水槽に入ったマンバのところへ行き、水槽のすぐそばに立っていた私は、Donnがヘビを刺激すると、ヘビがガラスにぶつかってきたのを覚えています。私は思っていたよりかなり近くにいたのです。それから、Draegerが木刀を持って草

地へ行き、遊ぶためのヘビを捜しまわって見つけたという話をペナンの人から聞きました。

もう1つ彼がとても関心を示していたのは、人間の肉体のタイプです。例えば、川を渡っていると、渡し守の筋肉組織をじっと見つめて、どの筋肉が生まれつきのものか、鍛えられたものか見分けようとしていました。彼は大変な読書家でした。Draegerが実際に薦めてくれた本を覚えています。

1冊は、Don Atyeoの*Blood and Guts: Violence in Sports*です。どちらかというによく知られた本でしょう。他の本はもっと学術的で、Johan Huizinga（ヨハン・ホイジンガ）の*Homo Ludens*（ホモ・ルーデンス）、Lionel Tigerの連帯する男性について論じた*Men in Groups*、E. O. Wilson（エドワード・オズボーン・ウィルソン）の*Sociobiology*（『社会生物学』）です。DraegerはWilsonを高く評価していました。この種の研究に関わっている人々は自身を「進化心理学者」と呼ぶのでしょうか。

それと、これもDraegerが興味を持っていたことですが、彼は実際に何度かオーストラリアへ赴き、オーストラリア人のランニングコーチ、Percy Ceruttiには賛同すると話していました。また、有名なアメリカのレスリングコーチ、Dan Gableについても話していました。Gableは、アメリカ人が眠っている間でもロシア人は訓練しているのだという考えに本当に腹を立てていました。

Draegerは、古流武術は生き残れるのか、また生き残れたとしてもどのような形になるのかと深く懸念していました。我々も非常に興味があり、感銘を受け、

Draegerと同じようにぜひとも香取神道流に入門したいと思っていました。振り返ってみると、Draegerには非常にいら立たしいことだったに違いありません。古流武術を次世代に残していき、外国人の修行者をさまざまな古流武術に入門させたいと思っているが、そうするためにはどうすればよいか、彼は我々に辛抱強く説明してくれました。彼は、特に、新陰流と立身流への入門を考えていると言っていました。他の流派のことも話していたかもしれませんが、残念ながら思い出せません。

我々はペナンからスマトラ島北部のメダンに移動しました。お世辞にも世界で最も美しい都市とは言えませんでした。いささか汚い場所で、地元のホテルにチェックインしてすぐに2人の日本人メンバーがしたことは忘れられません。彼らは弁当箱を取り出して、梅干しを食べ始めたのです。その夜、我々は柔道の道場を訪れました。最初、若い指導者は我々が誰かわかりませんでした。その1人が10年前にその道場にいたDonn Draegerだとわかると、30分もしないうちに、年上の指導者たちが集まってきました。そして彼らが最初に言ったのは、ホテルを変えるべきだということでした。

メダンを訪れた理由の1つは、地元のオランウータン・リハビリテーション施設で調査することでした。もちろん、アルコール中毒のオランウータンがいるのではありません。どういうことかという、オランダの植民地時代にはオランウータンを飼うことがステータスシンボルだったのです。リハビリテーション施設の目的は、それらのオランウータンを保護し

て、野生に帰すことでした。 Draegerがリハビリテーション施設に興味を持っていた理由の1つは、霊長類の利き手の問題に関心があったからです。リハビリテーション施設を訪れた日に、我々は地元のコーヒーショップに入り、カウンターの後ろで働いている男性と話す機会がありました。たぶん店のオーナーでしょう。彼はわざわざカウンターから出てきて、シラットの「形」を見せてくれました。私がシラットを見たのはそのときが初めてでした。空手の経験から「形」という考えには馴染みがありましたが、実際に見るのはまた別でした。非常に興味深いものでした。

これは我々が船でサモシール島に向っている時の写真です。かなりユニークな場所です。スマトラ島北部にあります。トバ湖はインドネシアで最も大きい湖です。約7万4,000年前に起こった巨大火山の噴火によって誕生しました。Chip (Hunter Armstrong氏)、君は覚えているかな？ 人生で最も恐ろしい経験の1つでした。乗っているバスが道路から転がり落ちたりしたら、下まで真っ逆さまだったのです。概して、スマトラでは、車での移動が安全だと感じることはありませんでした。ある夜、私は橋に対して悪い予感がして、どうしてもジープから降りると言って、ジープが橋を渡ってから、私は歩いて橋を渡りました。忘れられない別の嫌な経験は、アチェからの帰り道、Draegerが小形バスの運転手が寝てしまわないようにずっと注意していたことです。

インドネシアでは非常にめずらしいことですが、バタック人には多くのキリスト教徒がいます。

我々はあわただしくアチェに向かい、我々の一致した意見は、自分自身を守るために何らかの魔法を経験すべきだというもので、実際に経験しました。

インドネシアのナイフ文化について話すことになっていましたね。我々はシラットの要素が含まれた舞踏を見学し、そこにはこのような動きがありました。その動きについて尋ねると、ナイフを取り出す動きを象徴しているということでした。人々にそのことを尋ね始めると、ほとんど全員がナイフを携えていることに気づきました。いつでもナイフを取り出せるのだという我々への警告のようなものだったのです。

旅行の終わりの頃には、Draegerは声に出して考えていました。仕事に支障が出始めるまで、どれくらい現地で調査を行えるかと。彼は3カ月が最も効率的だろうと考えていました。2ヵ月目に一番いい仕事をし、結果として…。

非常に面白いと思った印象的なことは、Draegerは同時に関わりを行っていたことです。その1つは、ハワイのビジョップ博物館のために芸術品を購入し、一方でガイドのPelawi氏を雇ってよかったと実感し、報酬を、50%は無理だが、10~15%上げればどれだけPelawi氏のためになるかと説明していました。

この写真では、私はティッシュの箱を手にはしていますが、ひどい風邪をひいて鼻水が出ていたからです。また、チーズを持っていますが、3日間で食べたのはそれだけでした。2週間で10キロほど体重が落ちました。それが現地調査の現実です。今となってみれば、どれほどのことを成し遂げたのか

はわかりませんが、確かなことでもあります。Draegerにとっては、我々の現地調査への適性を評価する機会となったに違いありません。思い返すと、Draegerはいつも、東京からバンコクまで飛行機で行き、その後は列車を使っていました。長い列車の旅は人が仲よくなる機会であり、調査チームにとってもお互いに話をする機会になりました。

ではブレインストーミングしてみましょう。Draegerの人生と彼が遺してくれたものをどのように称えることができるでしょうか？ 私からいくつか提案があります。彼の名前を冠したスポーツのトロフィーを作る。彼の書簡を出版する。彼の伝記の執筆に奨学金を出す。武器学の研究のために資金を用意する。毎年、hopology (武器学) についての講演を行うか会議を開催する。学部生向けのhopologyのコースを作る。Chip (Hunter Armstrong氏) が先日言っていました、我々はこのことを慎重に考えて、武器学の図書館か博物館を適切な第三者機関に設立し、Draegerと関係のあった人たちにインタビューを行い、記録し、出版し、そしてニュースレターやジャーナルでhopologyに興味のある人たちにディスカッション・フォーラムやリソースを提供していくべきです。hop-lite (古代ギリシャの市民兵士) やhoplos (神話上の装甲動物) というhopologyの用語をふたたび目にするのもうれしいものです。ありがとうございました。(拍手)

【長尾】

ありがとうございました。 martial arts のフィールド・リ

サーチがいかに大変かということがご理解できたと思います。それでは続けて Hunter (Armstrong) 先生、よろしくお願いします。

【Hunter Armstrong 氏】

最初に、お招きいただいた武道学会に感謝申し上げます。皆さんにお会いできてうれしく思います。ここで話してできるのは皆さんののおかげです。本日はお越しいただきありがとうございます。

Draegerが古流武術に与えた影響について話するつもりですが、さらに重要なことは、武器学という分野の発展につながる彼へ影響です。

まずはアフリカのハンターの映像をご覧ください。ここには古流武術の時代の日本人が活用した人間の能力が示されています。彼らはマサイ族の小集団に属するハンターです。弓を持って、肉を探しています。彼らは餌食になった動物をむさぼり食べるライオンの群れをじっと観察しています。このハンターたちは狩りをしていません。支配しています。彼らはライオンの群れに近づき、威嚇するのではなく、支配しています。冷静なマインドセットです。腕のいいハンターの考え方です。戦うのではなく、ただ支配するだけです。ライオンをじっと見つめます。大陸で最強の捕食者が人間から逃げていきます。武器を使ったのではありません。心を投影する能力、この映像に映っているものを越える能力によるものです。ライオンは遠くには逃げていません。今は人間たちを観察しています。そして、どうして自分たちは逃げたのだろうと考えています。ハンターたちは向きを変えます。肉を切り

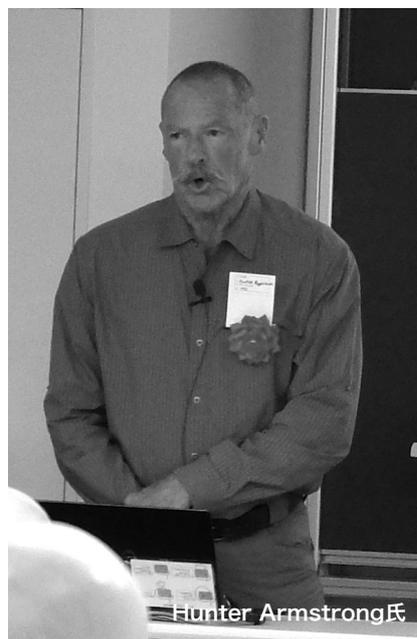
取ると、去っていきます。このことを覚えておいてください。また後ほど、このことについてお話しします。ですが基本的にこれが、Draegerが調査していたことの重要な側面でした。

この写真はもう3回見えていますね。ですから、彼の経歴については、それほど詳しくはお話ししません。ご存知のように、Draegerは8歳のときにミルウォーキー州のウイスコンシンで柔道を始めました。1943年には、海兵隊に入りました。海兵隊では将校となり、太平洋戦争で戦い、朝鮮戦争にも従軍しました。終戦後もはしばらく日本に滞在し、その後一時的にアメリカに帰りましたが、最終的に日本に戻ることにしました。

Draegerがhopologyの概念を系統立てて考え始めたのは、日本に戻る旅の間でした。hopologyは簡単に言うと、人間の闘争的な行動の発達と進化についての研究です。当時、彼は特にcombative systemsに注目していました。もちろん一番興味があったのは日本のcombative systemsです。彼は柔道を始めるとすぐに、ほかの武闘システムを現代のものも古いものも調べ始めました。柔道や空手道や剣道は、彼が調べた現代のシステムです。彼はまた、現代の日本の文化の調査から、戦場指向のさらに古い文化の調査へと移って行きました。先ほども述べられたように、彼は神道夢想流に入門し、つぎに香取神道流に入門しました。日本の武道を研究している日本古武道振興会とともに調査を始めました。しかし彼の関心は、日本の文化にとどまらず、世界中の異文化へ向けられました。アフリカ、オーストラ、

アジア、そしてほとんど知られていませんが、モンゴルと同じくらい強い武闘文化を持つヤクートの人々を調査し始めました。

Draegerは彼がmartial systemsと呼んでいるもの、つまり戦場と関連した軍事的なもの、一般人が使用するcivil systemsの間にはっきりとした違いがあることにも気づきました。civil systems、つまり市民格闘技術は、たいていの文化で、自己防衛やスポーツ、娯楽、精神修練として使われています。さまざまな武具を使うものから、素手で行うものまでいろいろあります。棒術は世界中でよく見られます。おもに農業社会、そして牧畜社会で使われます。これはインドの棒術Silambam (シラムバム) です。動物から盗賊まであらゆるものから守るためです。これはスマトラのSilat Harimauです。ナイフが使われていますが、ナイフは実際に武器であり、マチェテ (中南米に多くみられる山刀) であり、これらはcivilian systemsです。戦場のためのものではありません。自分自身や家族、コミュニティーを守るためのものです。素手で戦



Hunter Armstrong氏

う武闘（インド）。これもまた civilian systemsです。自分自身、集団、家族を守るためです。 Martial systemsやmilitary systemsではありません。これらの2つの姿勢を見ると、驚くほど似ています。とはいえ、さほど驚くほどべきことではありません。結局、我々は皆、人間なのですから。人間はみな同じように動くものなのだとこのことです。

次は空手術です。東恩納盛男先生とハンサムなアメリカ人男性です。彼の名前は思い出せません。ちなみに場所はマレーシアのペナンです。

Sport combative systemsの話をしてします。よくある sport combative systemsの1つはグラップリング（組み技で戦う形態）です。世界中のほとんどすべての文化社会には、ある種の年齢層に、つまり若者のグラップリングがあります。この写真はNubia（ヌビア）、アフリカのグラップリングです。この写真はアジアのある国で、そのグラップリング（スポーツ柔道）です。この写真はスポーツ空手道です。この写真は古い沖縄空手術をスポーツ化したものです。かなり大きな違いがあります。ふたたび sport combative systemsですが、西洋のボクシング（スポーツ・ボクシング）です。これらはすべて、さまざまな機能としての civil combative systemsです。

先に述べたとおり、Draegerは8歳のときに、特に日本の格闘技術に興味を持ちました。しかし、彼の格闘技術に関する文化的な見方に最も大きな影響を与えたのは、第二次世界大戦と朝鮮戦争での海兵隊員としての戦場の経験でした。この戦場の経験から、死と

隣り合わせの状況において、体と心を鍛える重要性を理解しました。戦場のために体を鍛える、戦場のために心を鍛えるは、道場で体と心を鍛えるという考えとはまったく異なります。というわけで、戦場の経験は、その違いを理解することに気づかせてくれました。

そこでDraegerはその答えを日本のmartial cultureに関連した伝統的な戦闘システムに求めました。柔道の知り合いから、古流武術・古武道を紹介されました。そして神道夢想流と香取神道流に入門したのです。当時彼は、（日本）古武道振興会とともに研究していました。彼の研究対象は日本の古いmartial artsでした。彼がmodern（現代）bujutsuとbudōとbattlefield systemsのためのclassic（古い）bujutsuとbugeiを区別つけ始めたのは、その分野でした。

このスライドはDraegerの講演からの引用です。

- ・Bugeiあるいはbujutsuは、戦いの場での勝敗に関して格闘技術を重視した集団防衛のために考案された武士の本質でした。

- ・Bujutsuは集団の団結であり、個人や自己防衛のためのものではありません。

- ・伝統的なbugeiの場合は、武士が個人レベルで厳しく、“男らしい”生活を送る必要があったことに基づいていました。

先ほども述べたように、この区別が（Draegerの）戦場での経験から生まれたことを覚えておいてください。

これは伝統的なbujutsu systemsの例、新陰流剣術、貫流槍術です。これらは戦いに出る武

士が訓練するために、戦いの場に基づいて開発されました。

Budōあるいはnon-battlefieldのsystemsは、Draeger説によると、budōは見識ある人間の育成を重視した、武職専門家ではなく庶民の自己防衛のために考案されたものです。また、budōは戦いより、また、集団ではなく、私という個人の精神修養です。

とはいえ、Draegerが両者に質の違いがあると言っているのではないことを心にとめておいてください。どちらのほうが優れているとは言っているのではないのです。それぞれ違うものだと言っているのです。budōは1人で行うものです。剣を使った個人の能力の開発が目的です。この能力の機能としての目的は何でしょうか？もう1つ重要な問題があります。機能としての能力は何でしょうか？その目標は何でしょうか？

この区別を定義しようとする際、budō対bujutsuという分岐する概念を考察する際、Draegerはこれを世界レベルで展開できないかと考え始めました。当時、彼はInternational Hoplological Research Centerの創設に着手していました。ハワイと日本で、多くの人材を採用していました。Phil Relnick、Pat Lineberger、David Hall、Meik Skoss、Larry Bieri、Liam Keeleyそして私などです。

武器学の概念を明確にする過程で、誰もが当たり前だと思っている用語を定義する必要があることに気づきました。武器とは何か？みんな、武器が何であるかということを無意識に知っていると思います。しかし、武器学としては、武器が何であるかを定義する必要があります。何が武器で、

何が武器でないのか、また、combative systemとは何かを断定的に述べなければなりません。明確にする必要があります。では、どのようにそれを定義するのでしょうか？

武器：人工物。死やケガや損傷を与える、あるいは与えることができ、戦いの状況をコントロールすることを第一の目的としたデザインと機能。

重要な要素は次のとおりです。機能の第一の目的とデザイン。デザインと機能。武器の製造者と使用者。剣の製造者が戦いを目的とした剣のような道具を製造すれば、それは武器です。しかし武器の使用者がそれを壁に掛けているだけなら、まだ武器と言えるのでしょうか？ 明確な定義は、もし製造者がそれは武器であると言い、使用者が武器として使うなら、それは武器です。

もう少しわかりやすく言うと、ナイフは武器でしょうか？ ほとんどの場合、製造者はただナイフを作っているだけで、それが戦場で使われるとは思っていません。多くの文化では、ナイフは道具として使われます。従って、定義上は、製造者は戦いのためにナイフを設計したわけではありません。使用者はおもに木を切ったり、爪をきれいにするためにナイフを持ち歩いています。それは武器ではありません。「武器として使う器具」です。これらをはっきり理解しなければなりません。

システム：システム（の定義）はもう少し難しいです。組織化・体系化され、繰り返し行える動作・技術・行動の集まりのことで、行動や戦いに適用したり、あ

るいはその準備として使われる、心にとどめておくべき計画・目的・デザイン・機能。

繰り返しますが、重要なキーポイントはデザインと機能です。combative systemsを検討して、その定義を少し拡大しなければなりません。いくつかの側面に着目して、さらに詳しく説明しなければなりません。そのシステムの機能的目的、combative systemの適用を確認しなければなりません。

ちなみに、この区別するという考えは、Draegerのbujutsuとbudōの違いを明らかにするための区別から来ています。Draegerの考えでは、bujutsuとbudōはグローバルな標準ではmartialとcivilに分かれます。bujutsuとbudōという概念がない文化もあります。そのような文化には世襲の武士階級もありません。しかし、武道家や軍人と、自分の身を守らなければならない一般人との区別はあります。martial combative systemの概念、またそのデザインと機能は、軍事的な戦場で運用されることが第一に意図されています。martial systemsはbattlefield systemsです。これに対してcivil combative systemsは、そのデザインと機能が一般人にとって役立つように意図されています。戦場と、それ以外の場所。前にも述べたように、combative systemsの大部分は、世界的に見て、martial systemsではなく、civilian systemsなのです。

どのcombative systemにでも適用できるものは限られていて、そのような適用はその機能的な目的の性質を明らかにするのに非常

に役立ちます。martial systemには、おもな使い方のタイプが2つあります。集団戦闘、あるいは戦場での一対一の戦い。古典的な、銃器が登場する前の歴史が、基本的に一対一の戦いです。我々は集団で訓練しますが、最後には武器を手で一対一で戦います。銃器が登場してからは、集団としての能力が強化されてきました。これらは戦いの軍事的側面あるいは武闘的側面を定義しています。

civil combative systems。一般人にもいくつかの可能性があり、自己防衛は、自分だけを守る場合と集団を守る場合があります。集団の場合、現代の社会というより、村社会で、自分の村を他の村や侵略者や盗賊から守る能力、村の中で自分たちを守るための男性と女性の集団の能力であり、そのような能力は村落全体の生死に関わってきます。

civilian combatの概念の2番目にあり得る使用は、相手から挑まれた一対一の決闘です。これもまた、村の階級社会でしばしば起こりえます。報復や復讐、こういうことはすべてcivilian duel systemsの一部です。agonistic（闘争の）はもともと「競争、運動競技」を意味する古代ギリシャ語に由来します。civilian systems、特に今日の多くのcivilian systemsはsport systemsあるいはathletic training systemsであり得るということです。

そして最後に精神修練です。概して言えば、新しい目標を追及し、悟りを開き、認識がより高まり、普遍的な心を得て、変わったさらに古いmartial systemsです。

このmartialとcivilの二分法は、Draegerのbujutsuとbudōの概念に及び、またそこから広がっていきました。bujutsuはmartial systemsと同じことであると考えられました。budōはcivil systemsと同じことだと考えられました。

この写真（銃剣術）は典型的な現代のmartial combative systemです。Spear（槍）の使用から生じています。現在でもまだ、戦いの見方を訓練する手段として使用されています。誰も海兵隊員が実際に戦場の戦いに参加するとは思っていませんが、戦いのため、戦いのための見方の一番いい訓練方法は、武器を持って行うものだといまだに信じられています。

この写真（フェンシング）はcivil combative systemです。スポーツの目的は運動能力と運動競技です。

civilとmartial、戦う場の身体的な必要性とさらに重要な精神的な必要性の区別を検討していく過程で、我々は攻撃性についての研究に出会いました。その研究によると、行動学的研究によって、感情的攻撃と捕食的攻撃と呼ばれるもの間にははっきりとした区別があることがわかったとのことでした。感情的攻撃は、高い感情の喚起を引き起こす攻撃です。捕食的攻撃は、非常に冷静で落ち着いていて、計画を立てるために使われます。これらの2つの異なるタイプを見ていきましょう。これらの攻撃性は最初、狩りを行う哺乳類に見られました。

感情的攻撃です。序列のあるオオカミの群れを見てみましょう。この高い感情の喚起で、オオカミたちは大きなうなり声を上げて、

威嚇の姿勢をとります。まさに威嚇で、たくさんのアイコンタクトが行われます。実際の攻撃はあつという間に終わります。攻撃が実際になされるなら、それは怒りによる攻撃です。ここで重要なのは、この威嚇は動物にとって群れの中の支配権を確立するための手段だということです。うなり声を上げ、耳を後ろに伏せ、体が大きく見える態勢をとるのはある種の行動、攻撃性です。それが威嚇です。これらはすべて感情の露呈、脅威の露呈です。キツネ、クマ、アシカもこのような行動を示し、この威嚇を示す態勢と顔はこれらの動物に共通です。これらは殺すための戦いではありません。ケガを負うことにはなるでしょうが、殺しを目的とはしていません。その目的は支配権を確立することです。

捕食的攻撃は異なる種の間で見られる攻撃です。狩りを行う動物と獲物。ガゼルを追うライオン、ネズミを追うネコ。その目的は食べるために狩って殺すことです。すぐに動いて攻撃できる態勢でなくてはなりません。誇示ではありません。効率的でなければなりません。攻撃の間に立てる音は、獲物を気絶させるか驚かせるためのうなり声か叫び声ぐらいです。相手とのやり取りはありません。目は情報収集のために使われます。クマとキツネとアシカの顔を思い出してみると、目はアイコンタクトを行っていました。それにより、つながりが生まれます。それが動物たちのしていることです。群れ社会の中でやり取りをしています。ハンターである動物は獲物とアイコンタクトをしようとはしません。

ここでの重要な区別は、狩りを行う哺乳類と怒っている哺乳類の脳研究からわかったことです。狩りを行う哺乳類は冷静で、落ち着いていて、獲物に忍び寄って追跡し、自分の動きを計画することができます。怒っている哺乳類はそのようなことができません。計画して忍び寄り、狩りをするというこの能力は、生き残るための手段です。そつと忍び寄るライオン、そつと忍び寄るオオカミ。その態勢は次に動くためのものであり、身を潜めて行動を計画することができます。

このほかに、狩りを行う多くの哺乳類に見られるのは、群れで行動する能力です。捕食者の狩りの行動は、競い合うためではなく、獲物を殺すために使われません。人間の闘争的な行動は、狩りを行う哺乳類の行動によく似ています。人間にもまた感情的行動があります。そして捕食的闘争行動も。感情的な行動は、集団内で支配権を確立しようとするように、たいてい集団内で示されます。肩をいからせ、胸を張り、アイコンタクトを行い、いろいろなことを言葉にします。すぐに感情が喚起され、またすぐに落ち着きます。この訓練コースを若い海兵隊たちに私が行うときには、その若い海兵隊員たちと一緒にやってみます。彼らにこの違いを説明し、1人に前に出てきてもらい、こう言います。「オーケー、それでは君と私だ。やってみよう」そして私がこうすると、相手はどうすると思いますか？ 彼はまったく同じことをするんです。私はもう少し近づきます。彼はどうするでしょうか？ もし頭がよければ、後ずさりするでしょう。私のほうがたくましいからです。あるいは、そ

うならないこともあります。たぶん私のほうが後ずさりするでしょう。要するに、このようなタイプの集団間の対立では、どちらか一方が譲歩できるということです。また、これらのタイプの感情的行動では、たいてい、殴り合いになることはありません。相手を傷つけることが目的ではないからです。その目的は支配権を確立することです。

その感情的行動は非常に感情的なものです。感情的な喚起を高いレベルで維持することはできません。怒りの頂点に達すると、すぐに降下します。実のところ、すぐに誰かを傷つけてしまわないようにクッションの役割をしているのです。

捕食的闘争的な行動はまったく異なります。オオカミとライオンのように、我々が狩りをするときの行動は、落ち着いています。感情の喚起ではありません。計画を立てて、それを実行する能力です。武器とチームワークを使う能力でもあります。人類がこの地球を支配することになった大きな能力です。

興味深いことに、人類はもうひとつ別のpseudo-predatory behaviorと呼ぶ擬似捕食的行動をするようになる必要がありました。10万年前の西ヨーロッパの狩猟採集民のように、まわりにはほとんど人がいません。自分の部族や狩猟集団や資源によって守られるための能力は、自分が他の集団の姿をとらえ、彼らを追い払って、自分たちの土地に立ち入らせないでいられるかにかかっています。自分の集団を同じ目に遭わせることはできなくて、「あなたたちはここに入れない」と言います。人間は他の集団を見つけて「彼らのことは平等な人間とは思わない」と言える能力を身につけました。他の集団の人々を人間以下に変え、それにより人類は同じ種族に対してハンティング行動を行えるようになりました。

これが人間の感情的行動です。すぐにわかります。高い感情の喚起、誇示、アイコンタクト、身体による意思表示、しかし比較的小さな損傷。勝利の栄光。この写真は法執行機関と一緒に行った訓練です。彼らは法執行機関の訓練生で、脅威度の高い接触

に対処する訓練を行っていました。彼らはどうしたのでしょうか？ 全員、恐れと怒りを示しただけでした。銃を引き抜くことを思い出したときにはすでに7回刺されていました。

この写真は30年前のマニラ郊外にいた警官です。彼は激しいケンカの現場に出くわしました。これは精神的行動でした。彼は拳銃を携帯していますが、感情の喚起が起こり、恐ろしくなります。ナイフを持った男から逃げます。彼は右手にピストルを持っています。拳銃の弾をすべて撃ちますが、感情の喚起のせいで外してしまいます。ナイフを持った男は彼を殺し、拳銃を奪いました。

人間の捕食的行動の特徴：計画とチームワークに必要な冷静さ、忍び寄る態勢、誇示することなく効率的に動く能力、声を上げない、視覚は情報収集に使う。この写真は100年以上前のアフリカと日本のクマのハンターです。この写真はアフリカの捕食行動のチームワークです。忍び寄る態勢です。その態勢は心と結びついています。

(Armstrong氏のプレゼンテーションは途中であったが、時間的都合から、ここでコメント・質疑応答にうつった。以下は、事前にいただいていた発表原稿から、プレゼンテーションでふれられなかった部分を補足する)

- ・世界中の多くの文化で、戦場のための接近個人戦闘システムが開発された。
- ・地理的状況と歴史的状況のユニークな組み合わせにより、日本の伝統的な戦場システムは、非常



に高いレベルの行動能力と身体能力をもたらした。

・世界の他の戦場の戦闘システムと多くの共通の特徴があるにもかかわらず、日本のkoryu bujutsu（古流武術）の伝統は独特である。戦場での戦闘の要求・ニーズに対する彼らの理解の深さは深遠であり、その目的に向けて個人の訓練に取り組む能力は驚くべきものであった。

・ホプロロジーの研究と発展のなかでいえば、戦争・戦場での戦闘の技術は何世紀にもわたって劇的に変化したが、人間の行動とパフォーマンス能力はほとんど変化していないことがわかった。

・戦場での戦闘のために個人を訓練する原則は、スパルタや、ローマの軍団、または戦国時代の武士の時代と、今日でも同じである。しかし、個々の武的振る舞いや能力について高度なトレーニングを開発した世界のすべての文化の中で、戦闘に関する知識のかなりの部分を保持しているのは、（私がかぎり）日本である。

・残念ながら関心の欠如により、日本の伝統的な武術の伝統は放置されており、実際に崩壊して博物館の遺物となる危険にさらされている。

・非常に早い段階で、Donn.Draegerは、これらの古い伝統は活気のある「生きている存在」であると私に言った。それらは「保護・保全する価値があるだけでなく、今日の世界でも、戦う人に適用できうる重要な生きた教訓がある」、と言っていた。

・1998年頃、私（アームストロング氏）はホプロロジストとしての役割の中で、アメリカ海兵隊から海兵隊のための新しい接近戦闘訓練プログラムの開発に協力する

よう依頼された。IHS (International Hoplology Society) が提供したトレーニングは、海兵隊によって「コンバット・マインドセット」と特に呼ばれていた。そのトレーニングの基礎となる原則は、特に日本の古流武術に基づいていた。

【長尾】すみません、Hunter先生のお話、これから面白いところですけども、ちょっとディスカッションの時間が全然なくなってしまいますので、酒井先生やAlex先生のコメントもちょっと短くなってしまいますが、残り25分の中でやっていきたいと思っています。では酒井先生のコメントをいただきたいと思います。

3. コメント

【酒井氏】素晴らしいプレゼンテーションをどうもありがとうございます。今日お3方のお話でDraegerさんがどういう方だったのかということが非常によくわかりました。ありがとうございます。今回のお話はDraegerさんの著作を取り上げるということですけども、私たち日本人が日本の中だけで、あるいは1種類の武道だけをやっていては分からない外か

らの視点というのがDraegerさんにありますし、あとさまざまな武術に深く関わられたという中からの視点、内外両方からの視点があつて我々には非常に示唆があるものであると思っています。

Draeger氏から受けた示唆を学会としてどういうふうに展開していくかということが我々としては重要だと思えますが、これはあくまでもエビデンスベース（証拠に基づいた）での議論によってこの問題に対する答えを導き出して、社会に発信することが重要だと考えます。幾つか彼の著作を見渡したところ、気が付いたところを指摘させていただいて、学会としてどう展開するべきか提示させていただきたいと思っています。

まず1つ目ですが、Hunter Armstrongさんがご指摘されているように、Draeger氏は「武術」と「武道」を明確に区別しています。武術をmartial arts、武道をmartial waysとして区別していますが、武術のほうは目的が戦闘、対外的なものということになりますし、武道のほうはself perfectionという言葉に代表されますように、自己の内側に向いているということで違います。



武道を「martial ways」と訳していますが、武術の「術」をart、武道の「道」をwayとしています。しかし、道=wayでよいのかどうかということは、学会で徹底的にこれは論証すべきだと思います。特に「道」にはいろんな意味が含まれていて、道徳的な意味もありますし、難しいところでは中国思想でいうところの宇宙の大原理といった意味もあります。そういった含蓄を全て含めてwayとしていいのかどうかということは考えていかなければいけないと思います。

2つ目ですが、彼はそれぞれ2つの武術と武道について言及しています。武術のほうはclassical bujutsuとmodern bujutsu、武道のほうはclassical budoとmodern budoという2つずつ挙げていました。従来我々は近世、江戸時代までのものを武術とし、近代以降のものを武道と呼んでいますが、Draeger氏の場合には近世、江戸時代のものもclassical budoとあって武道の言葉を使っています。ですから江戸時代にはclassical budoとclassical bujutsuがある。近代になるとmodern budoとmodern bujutsuとなっています。ただ気を付けなくてはいけないのは、日本の近世、江戸時代にこういった意味で武道という言葉は使われていないので、後の時代に、現代になって、近代になってから、過去の事柄を表現した呼称としてclassical budoという語を使っていることを確認しなくてはならない。ですから我々が今「古武道」というのも一緒です。当時「武道」という言葉は使われていない。

学術用語としてこれが適当かどうかに関しては、かなり検討する必要がありますと思っています。例えば7世紀前の日本のことは「倭国」と言いましたが、我々はこれを「古代日本」と言っています。それと同じように当時「武道」と言わなかったものを「古武道」「classical budo」と言っているかどうかは、学会でしっかりと検証すべきことだと思っています。

3つ目です。武術と武道、我々ほどではないですが、Draeger氏は多少価値観に軽重を持って論述している部分があります。例えば、「Training of budo thus, it was believed, aimed at “higher values” than those of bujutsu.」と書いています。明らかにこの文章では「budo」と「bujutsu」の価値観に軽重を持たせていることを指摘できると思います。

4つ目、ここは重要なところですが、3次元からなるclassical bujutsuとclassical budoの内容のpriorityを明示しています。武術のほうは1番がcombatで、2番がdiscipline、3番がmorals。それに対してclassical budoのほうは1番がmorals、2番が同様にdiscipline、3番がathletic foam（美しさ）としています。両方とも「discipline」という言葉を使っていますが、これがどうもキーワードになるのではないかと私は感じました。ものすごく多くの「discipline」という言葉を使っています。

彼の著作を全部PDFにして、更にこれをWordベースに落とし込んで全部検索をかけてみました。そうしますと「bujutsu」や「budo」の用語使用回数に対して「discipline」もかなり多く使

用されており、特に3冊目については「discipline」の用語使用回数は「bujutsu」の約3倍、「budo」の2倍以上の記述がありました。（正確な回数については、再度Wordファイルを整えた上で検索する必要がある。）

この「discipline」の用語の使い方としては、修行や訓練という意味合いと、専門の分野という2つの意味内容で使われています。注目すべきは修行や修練といった意味でのdisciplineではないかと私は感じました。例えば「spiritual discipline」であるとか「stern discipline」であるとか「rigid discipline」、「austere discipline」という用語が使われているわけです。この「austere discipline」は索引では「shugyo」（修行）と書いてあります。

これが心に関わる用語であることは容易に予想がつきますが、この心の問題についてもうだいぶ、何十年も前になりますが中林信二先生が、あるいは最近では寒川恒夫先生が武術・武道における心を2つに分けています。1つ目が敵に対したときの心の在り方、もう1つが倫理道徳的な心の在り方です。ですから彼がbujutsuもbudoも2番目に持ってきている「discipline」という用語が心に関することであったのは容易に予測がつきますが、この心の内容のどっちに重点を置いているのかということ、今後検討していくべきではないか。そのことによって、この2つの用語の概念が明らかになっていくのではないかと思います。

最後に注目すべき点ですが、彼は「武芸」（bugei）という言葉は1回も使っていません。ここが

非常に興味深いところだと思っています。

【Alexander Bennett氏】大変参考になる話、本当にありがとうございました。お世話になっている剣術の先生がこの間入院されました。お見舞いに行ってきました。笑い話になりますが、「Alex君よく来てくれた。ちょっと気になったんだけど、あのどっかいアメリカ人、Draegerさん元気ですか…」と、突然聞かれました。「…いや、全然元気じゃないです。随分前に亡くなりましたよ!」。今まで1回もDraeger先生の話をしたことがないのに、入院中にいろいろ思い出しながら気になっていたのでしょうか。Draeger先生との交流はさほどなかったと思いますが、およそ40年前のどこかの古武道演武大会で見て、印象に残った偉大な人だったということでしょう。私はそう解釈しています。

多くの外国人の武道愛好家にとって、もちろん私も含みますが、Draeger先生は武道の実践者、学者、また開拓者の第一人者として広く知られています。しかしながら、日本ではもうほとんど

知られていないのが現実です。1982年に他界されましたが、70年代・80年代に英語で著された多くの武道書籍は、今でも英語論文に引用しないと信頼できる研究として評価されません。それぐらい影響力があったということです。私たち外国人武道学者からすれば大先輩です。

酒井先生もいろいろ触れましたが、Draegerの武道・武術論が外国において数十年も定説であって、西洋における日本武道・武術の思想や文化の理論的枠組みを与えてくれたと思われまふ。武道が国際的に最も成功している日本文化の例として挙げられます。世界中に武道がこれだけ注目されるようになったのは、Draeger先生なしではあり得ないことだといっても過言ではありません。世界的普及と理解という面からしますと、本当にすごい貢献をしているということなのです。どうしても言語的・文脈的に伝えにくい武道の細かいニュアンスなど、日本人の代わりにそれを発信しているのはDraeger先生です。

また、世界各国のmartial arts文化の比較研究において、優れた成果を出しています。日本の武道

学者は「日本の独自性」を強調しながら、あまり外を見ない傾向が著しくあります。Draeger先生は武道の比較研究という分野において貴重な研究成果を残した見習うべき開拓者だったと思われまふ。Draeger先生が亡くなってからは、武道学問が大きな進歩を遂げているため、彼の武道論が時代遅れになっていることは、仕方がないことです。決して軽視してはいけません。「あなたを見渡せたのだとしたら、それはひとえに巨人の肩の上に乗っていたからです」。そこで、スピーカーの先生方に2つほどお聞きしたいことがあります。

①Hoplology（武器学）という分野のDraegerの弟子として、師匠に比べてご自分の考え方が大きく異なってきたところはあるか。

②世界各国のコンバットシステム研究に励んだDraeger先生ですが、そこまで日本武道にひきつけたものは一体何だったのでしょうか。

残念ながら時間はもうないですが、後ほどの懇親会でも教えていただければ幸いです。どうもありがとうございました。



【長尾】コーディネーターの私の建て付けが非常に悪くて、もっと本当は時間を取らないといけませんね、3時間ぐらい取らないといけません。大変申し訳ないですが、フロアからはお1人にさせていただきますと思います。お3方のうちどなたか、あるいは複数でもいいですが、どうしても今日これだけは聞いておきたいということがありましたらお願いします。

4. 質疑応答

【Gil Vincente 氏】 こんにちは。Draeger先生はこれらすべて地域や文化の戦闘システムを結びつける何らかの仮説をお持ちだったのかお聞きしたいと思います。

【Hunter Armstrong】 はい、ひとつにまとめたいという目標を持っていたと思います。人間に関する問題です。武器を巧みに扱う

能力についてではありません。人間は、生きていく中で受ける脅威や混乱や攻撃に対処するための考え方をどのように養ってきたのかということです。たぶんこう締めくくったと思いますが、私が論じてきたのは、特に彼がその情報をどのように見て、古流武術がその訓練の過程でそれを発展させてきたのをどのように見ていたのかと

いうことです。それは重要な要素です。物理的な違いが多い一方で、どのような文化に対しても最終的な目的は同じでした。

(以上)



特別企画2019

若手研究者の研究や博士の学位取得までの取り組みについて紹介

最新若手研究者の動向

近年、博士の学位を取得した、あるいは取得を目指す若手研究者が増えてきた。中には剣道の指導的立場に立ちながら、あるいは日本代表レベルの選手として活躍しながら、研究と現場とを両立させて学位取得を果たした研究者も現れている。そこで今回は、一昨年度からの特別企画に引き続き、博士の学位取得を果たした研究者を招いて行われた「武道ワールド (<https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/>)」(代表：酒井利信筑波大学教授)の企画に参加し、学位取得までの経緯や取り組みについてインタビューを行なった。

研究紹介・インタビュー

廣野 準一 氏 (信州大学総合人間科学系講師)

学位論文

「超音波Real-time Tissue Elastographyを用いた腓腹筋およびアキレス腱に対する運動負荷後の硬度変化に関する研究」

2008年3月に筑波大学体育専門学群卒業、2010年3月に筑波大学大学院博士前期課程体育学専攻を修了。筑波大学体育系特任助教を経て、2013年4月より信州大学に赴任。

2016年に筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程スポーツ医学専攻を修了し、博士号を取得する。剣道五段。現在は信州大学学友会剣道部監督の役職につき指導する傍ら、自身でも第69回国民体育大会への長野県代表としての出場をはじめ、剣道に励んでいる。また、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーとして、剣道日本代表や全日本スキー連盟コンバインド強化指定選手へのサポート活動も行う。

<学位論文概要>

【背景】筋・腱の垂直方向への圧力に対する抵抗から求められる硬さの指標はhardnessと呼ばれ、重要な情報源として様々なスポーツ現場でのコンディショニングに活用される。しかし、従来法である触診は、評価者の経験に左右されるうえに、その情報は定性的で共有が困難である。また、従来の客観的な評価法である押込み式組織硬度計は、皮下組織全体の抵抗値であり、組織固有の硬さを評価することはできないといった問題を有する。近年、超音波Real-time Tissue Elastography (RTE) という、超音波診断装置にて非侵襲的に組織固有の硬さを、客観的に評価する技術が考案された。

【目的】RTEのスポーツ現場における筋・腱のコンディション評価への応用可能性について、検討することとした。本目的を達成するために、RTEは(1)測定信頼性が高く、(2)様々な運動による筋・腱の変化を観察でき、(3)押込み式硬度計と違いがあることを示すこととした。

【方法】

<研究課題1：測定の信頼性の検討>

健康男性の腓腹筋およびアキレス腱に対して、異なる足関節角度、測定回数でのRTE測定を行い、検者内・検者間信頼性を検討した。

<研究課題2：運動による変化の検討>

1) 一過性運動による変化

健康成人男性を対象として、一過性運動前後での筋・腱のRTE硬度変化を検討した。

2) くり返しの運動による経日的変化

健康成人男性を対象とし、4日間くり返す運動による筋・腱のRTE硬度変化を検討した。

3) 剣道の合宿における経日的変化

剣道競技者を対象に、5日間の剣道強化合宿中の筋・腱のRTE硬度変化について検討した。

なお、2と3では従来法である押込み式硬度計との違い、筋タイトネスや運動パフォーマンスとの関連についても検討した。

【結果】

<研究課題1>

足関節を中間位に固定し、3回以上測定した平均値を用いることで、検者内での腓腹筋およびアキレス腱のRTE測定、検者間でのアキレス腱のRTE測定で良好な信頼性を得ることができた。

<研究課題2>

1) 一過性運動による変化

腓腹筋は運動直後、15分後、30分後、24時間後で、アキレス腱は運動直後、15分後の測定で、運動前と比べて有意に高い値を示した ($p < .05$)。

2) くり返しの運動による経日的変化

運動前と比べ、腓腹筋のRTE硬度は2日目、3日目の測定で優位に高い値を示し ($p < .05$)、4日目以降は有意な変化を示さなかった。またアキレス腱は、有意な変化を示さなかった。さらに押込み式硬度計では、腓腹筋・アキレス腱共に有意な変化を示さなかった。腓腹筋のRTE硬度の変化は、筋タイトネスやダイナミックな運動パフォーマンスと類似した変動傾向を示した。

3) 剣道の合宿における経日的変化

合宿前と比べ、腓腹筋のRTE硬度は強度の高い練習の翌日から有意に高い値を示した ($p < .05$)。またくり返しの運動実験と同様に、アキレス腱のRTE硬度と押込み式硬度計の硬度は合宿期間を通して有意な変化を示さず、腓腹筋のRTE硬度は筋タイトネスやダイナミックな運動パフォーマンスと類似した変動傾向を示した。

【まとめ】RTEは、(1) 足関節中間位固定・3回以上の測定平均値を用いることで高い信頼性を示し、(2) 実際のスポーツ動作を含めた様々な運動による筋・腱の変化を観察でき、(3) 押込み式硬度計よりも鋭敏に硬さの変化を観察できることが示された。以上より、RTEはスポーツ現場における筋・腱コンディション評価に応用できる可能性が示唆された。

1.研究に関する質疑応答

【齋藤】ご発表ありがとうございます。研究内容について、非常にわかりやすくお教えいただいたと思います。まずは研究の内容について、皆様からご質問等があればお受けしたいと思います。

【二宮】卒業論文の頃から、剣道で起こりやすいとされているアキレス腱に着目して研究を進められていたということですが、剣道でアキレス腱断裂は、どのような瞬間に起こり、どのような要因が考えられるのでしょうか？

【廣野】ありがとうございます。色々と言われていることはありますが、正直なところまだまだ研究数が少なく、間違いなくこれだとは言いきれないところがあります。ちょうど私も研究を進めているところなのですが、アキレス腱断裂に関する過去の調査では、断

裂直前には痛みを訴える場合もあればそうでも無い場合もあるようです。ただ近年では、アキレス腱断裂が起こる際には、事前に腱の組織が変性していると言われています。すでに腱が弱くなっている状態で、その日は調子が良くてどんどん打ちに出て、不良なフォームを取ってしまった際に、過剰な負荷がかかって断裂するという事は考えられそうです。また、動きとしては、下がった状態からすぐに前に打ちに出る場面で断裂したと、多くの先行研究で報告されています。他の種目よりも発生時の動きが特徴的なところは、着目すべき点だと考えています。そもそも、そのような動きをしなければ断裂しないということもできるかもしれませんが、対人種目である以上、実際の競技場面ではそうもいかないと思います。どのように関節が動いた場合にアキレス腱

に過剰な負荷がかかるのかを明らかにして、良いフォーム、悪いフォームを明らかにすることで予防につなげる研究についても、今進めているところです。

【二宮】右足より左足の方に起こりやすいのですか？



廣野 準一 氏

【廣野】それは、今までされている報告では打突の踏切足に圧倒的に多いと言われています。

【杉浦】剣道では、稽古外にトレーニングをすることが少ないと感じているのですが、稽古後にストレッチをすることで、怪我が予防できるのでしょうか？具体的な方法があれば合わせて教えてください。

【廣野】正直なところ、こちらに関してこれをしてあげれば絶対怪我をしないとは言いきれないところはあります。ただ、運動によるストレスで筋が常に縮んだ状態だと、腱も常に引き伸ばされたような状態となって余計なストレスがかかったり、それが原因となり上手に関節を動かすことができなくなったりする可能性が考えられます。そのような状態を防ぐために、ストレッチ等の何かしらの方法で筋のコンディションを維持することは大切だと、私自身がトレーナー活動をする中でも選手に伝えています。具体的な方法としては、かなり色々な手段があります。例えば、鍼やマッサージで他人に行ってもらう方法や、自分でじっくり時間を伸ばすストレッチがあり、これらの方法で筋の柔軟性が再獲得できることは、研究レベルでもわかっています。ただ、この方法をしてあげれば絶対に怪我をしないということは言い切れませんが、これらの方法をケアとして行ってコンディションを整えたほうが良いだろうということは、まず間違いがないと考えています。

【齋藤】他はいかがでしょうか？

【酒井】先入観としても、筋や腱が硬くなるのは良くないことだと思います。ただ、最近、練習前にストレッチをして緩めた状態にす

るのは、あまり良くないという研究成果もあるという話を耳にしました。そのあたりについてはいかがでしょうか？

【廣野】そのような研究については、確かにあります。今のお話は、運動前にじーっと伸ばすようなスタティックストレッチを行うことで、その後の運動パフォーマンスが低下するという報告のことかと思えます。ただ、それは現場での方法とは異なり、あくまで実験として設定しているところがありまして、長時間伸ばした状態を維持して、その後すぐに何かしらの運動パフォーマンスを発揮させ、低下したとする研究が多いです。近年の見解では、20秒以下のスタティックストレッチ実施後では、運動パフォーマンスはあまり低下しないとされています。また、実際の現場ではスタティックストレッチ後にすぐに運動をさせるということはあまりなく、その後に動的なストレッチや動きのリハーサルをしてからパフォーマンスを発揮します。そのように実施後に運動を加えた場合では、パフォーマンスは低下せず、向上するとしている報告もあります。怪我の発生については、運動前のストレッチの実施有無だけが、予防につながるとは言いきれない部分がありますので、やったほうが良いだろうという形で行われているのが現状かと思えます。

【酒井】別の質問になりますが、現場への応用ということを考えてと、今回の研究で用いた機器は高価なものですか？

【廣野】高価です。私個人ではとても購入することができません。

【酒井】では、応用することは難しいのでは？

【廣野】そうですね。現場での応用としては、そのまま用いるということは難しいと思います。今回用いた機器を基準として、携帯性に優れた比較的安価な機器や、現場で簡便に測定できる可動域等の方法と組み合わせて、応用することが現実的かと考えています。そのためには、まず今回用いた機器で筋や腱が硬くなることで発生する諸問題を明らかにする必要がありますが…

【齋藤】例えば、今回の機器で捉えられる硬さと、トレーナー等が触って評価する硬さとの関係については、まだ明らかになっていない？

【廣野】まだ明らかではありません。私自身も興味を持っていますが、研究としてどのように設定するかが、なかなか難しいなと感じています。

【大石】従来法に色々問題があるというところから、今回の超音波エラストグラフィという方法にたどり着いた背景には何があったのでしょうか？

【廣野】ちょうど大学の事業で、新たなコンディション指標として使える方法はないかという話がありまして、乳がんの検診等で使われている硬さの方法があるという情報を得ていたことがあります。そのように色々な分野の情報にもアンテナを張っておくことは重要だと考えています。

【大野】先ほどの剣道合宿中の硬さ変化の結果の中で、合宿による負荷によって筋の硬さは増加したとあったかと思えます。ただ、5日目朝の硬さが4日目朝より数値としては低くなっていたところが気にかかりました。私個人の経験としては、やはり日が進むにつれて疲労は溜まるという感覚がある

のですが、筋の硬さと疲労の関係については、どのようにお考えでしょうか？

【廣野】ありがとうございます。今回と使用した機器は異なるものの、かなり昔の先行研究では、非常に激しい運動後にやはり筋は硬くなるのですが、さらに疲労困憊の状態では筋の硬さが減少したという報告もなされています。また、今回の発表では省略しましたが、実験室にて毎日、一定負荷をくり返しかけた際の硬さの変化についても検討しました。そちらでも、合宿実験と同様に、負荷をかけた翌日から硬さは増加しましたが、負荷運動開始の3日後以降は実施前の硬さと有意な差は示しませんでした。こちらは1日につき踵上げ運動を計60回実施という繰り返しの繰り返しでしたので、疲労困憊というよりは適応や馴化のようなものが起こったのではないかと考えています。これらのことから、今回の合宿実験でも、疲労困憊によって筋がいわゆるへたったような状態になったのか、身体が負荷に慣れたのかについては、筋の硬さという指標だけではなく、他の指標も含めて検討を進める必要があると考えています。

【大野】疲労困憊で筋がへたったような状態になった時に、怪我が起こりやすくなるということでしょうか？

【廣野】そのような可能性も考えられますし、負荷に慣れてしまったという場合は、トレーニングの原理をふまえると、より高い負荷を与える必要があると思います。何れにせよ、くり返し負荷をかけた合宿実験では合宿前と比べては有意に高い値ではあるものの、前日より下がっている傾向にあるところ、実験室実験で3日目に硬さが

減少したというところは、興味深い点であると思いますので、今後さらなる検討を進める必要があると考えます。

【齋藤】硬さの増加が、神経の興奮によるものなのか、筋の炎症によるものなのかなど、硬さとは何かを解明する必要がありますね。今回の研究ではそこまでは明らかになっていませんか？

【廣野】そうですね。今回、いくつかの検討材料となる指標は測定しましたが、これだけを持って硬さ変化の原因を解明する事は出来ていないと考えています。ただし、将来的に現場に応用することを考えた時は、なぜ硬さの変化が生じるのかを明らかにすべきかと考えています。

【ターニャ】今回の研究では、3つの課題が設定されていましたが、どの様に考えて課題を分けたのでしょうか？

【廣野】1つ目の課題は、一度運動負荷をかけた前後での変化と回復過程について検討するために、一過性の実験室実験を行いました。2つ目は、それを一度だけでなく、4日間続けて行った時の日々の変化について検討しました。実際の現場での練習やトレーニングは、くり返して実施されることが多いからです。3つ目は、

実際の現場でかかる負荷によってどのような変化を示すのか、今回少し詳しくお話しさせていただいた剣道の合宿での筋や腱の硬さ変化について検討をしました。この様に段階を設定して実施しました。

【ターニャ】なぜ3つに分ける必要があったのでしょうか？

【廣野】最終的には、3つ目に行った合宿実験の様な、現場でかかる負荷での変化を検討したいと考えていました。ただ、いきなり合宿によって変化したというだけだと、剣道の合宿中にどれだけ対象とした部位に負荷がかかるのかもわかりにくく、運動負荷による硬さ変化を検討するには不十分と考えました。そのために、2つ目の課題の様に合宿に近い様な毎日負荷がかかる状況で、運動負荷を一定にした実験を入れました。また、実際の合宿では測定にかけられる時間の制約もあるので、運動直後の変化や回復について検討するのはなかなか難しいです。そのためにも、1つ目の課題で一度の運動負荷前後での変化について検討をしました。

【酒井】合宿では練習試合等もあり、運動負荷も一定というわけではないので、寒稽古での検討の方がよかったのではないのでしょうか？



【齋藤】さらに硬くなりそうな感じもします（笑）。

【廣野】確かに、最後の課題とした現場での実験における運動負荷については、非常に悩ましい点でした。寒稽古では時間的な制約から今回は諦めましたが、やはり先生のおっしゃられた通り、運動負荷をなるべく一定にしたほうが、運動負荷による筋や腱の変化を検討するのは望ましいと思いますので、今後はその様な設定も考えてみたいと思います。

【齋藤】何らかの手段で運動量自体を測定して、運動量と硬さ変化の関係を検討することも面白そうですね。

【廣野】そのように思います。今回はそこまで検討できていないのですが、近年ではウェアブルセンサ等についている3次元加速度センサによって運動負荷を計測する方法もあったりするので、その様な指標と合わせてみることで、より詳細な検討ができるかと思えます。

2. インタビュー

【齋藤】先生は筑波大学の剣道部のご出身ということですが、事前に少しお話を聞いた際、入学当初はあまり大学で剣道を続けるつもりはなかったとおっしゃっていました。元々どのような形で大学を目指したのでしょうか？

【廣野】高校時代に大学進学を考えた際、アスレティックトレーナーという職業に興味を持ちました。剣道だけに限らず、体育・スポーツ現場で運動選手のサポートを行いたいと考え、そのような勉強ができる大学を選びました。

【齋藤】それでも剣道部に入った以上はやり遂げようと思ったということですね。

【廣野】はい。

【齋藤】その中でメディカルスタッフという、私が在学中にできた組織に入り、トレーナーを目指しながら稽古にも励まれたと聞いています。

【廣野】はい。剣道の稽古も行いながら、同時にメディカルスタッフとして活動していました。

【齋藤】大学院進学と博士号を取ろうと考えたきっかけは何だったのでしょうか？

【廣野】私は大学院には一貫課程で進学しました。ですので、大学4年生の時に大学院進学を考えた際には、すでに1つの道として博士号の取得も視野にありました。

というもの大学時代に、トレーナーとして現場で活動することを考えたときに、プロになる以外にも色々な道があることを知りました。その1つに大学に勤務しながら現場に出て行くという形を知り、周りにも大学教員をされている研究室の先輩も多かったため、自然と学位の取得についても考えるようになったのかと思います。

【齋藤】それは大学生の頃から、大学教員になろうと？

【廣野】もちろんそれも1つの選択肢としていれながら、大学時代にはまだトレーナーとしての勉強もそこまでしっかりとできているわけではなかったもので、もう少し勉強しながら色々検討しようと考えて、まずは大学院に進学しました。

【齋藤】その先に、大学教員になるという選択肢もあると考えての進学ということですね？

【廣野】はい。その可能性についても考えていました。

【齋藤】剣道部に所属しながらの勉強は大変だったかと思いますが、大学生から大学院生にかけ

て、どのように勉強を進めたのでしょうか？

【廣野】とにかく大学生の頃は大変でした。厳しい稽古をしながら通常の授業をこなすことはもちろん、メディカルスタッフとしての勉強会を稽古や片付けが終わった午後9時頃からはじめ、0時を回ること、勉強会の資料を担当する時にはさらに遅くなったりすることもよくありました。ただ、その勉強会で、スポーツ医学の全般的な基礎知識を得ることができたと思います。

【齋藤】それは大変でしたね。

【廣野】大変でしたが、経験のない中で選手のサポートをするからには、勉強するしかないな、と責任感のようなものもありましたので…

【齋藤】それは研究室のカリキュラムの中に組み込まれていた？

【廣野】いえ。カリキュラム自体には組み込まれていませんでしたが、ちょうど私が剣道部のメディカルスタッフに加入したタイミングで、スポーツ医学の研究室から剣道部に大学院生のトレーナーの方が派遣されてきて、大学院の勉強会を踏襲したような形で勉強会を行うようになりました。





【齋藤】それは週に何回ぐらい？

【廣野】勉強会の頻度としては、週に1回ほどです。ただ、勉強会で発表担当になった際には、やはり準備には何倍もの時間が必要ですので、ほぼ毎日のように資料作成に追われていました。

【齋藤】なるほど。それは、大学の時はそのようにされていて、大学院進学後も同じような形でされていた？

【廣野】大学院進学後は、学内にあるトレーナークリニックに所属しました。そちらのクリニックの開室時間と剣道部の稽古時間が重なっていたため、進学後はトレーナー活動に重きをおいて活動や勉強をしていました。

【齋藤】あまり剣道部の方には顔を出せなかった？

【廣野】そうですね。先ほどの通り、活動時間が重なっていたのと、その時はクリニックのスタッフがとても少なく、クリニックのリーダーや研究室代表にもなっていた関係もあって、あまり思うように顔は出せませんでした。

【齋藤】そのクリニックには剣道部の部員もきていたのでしょうか？

【廣野】例えばアキレス腱を断裂して長期で稽古ができないような部員は来室し、アスレティックリ

ハビリテーションや復帰に向けたトレーニングを一緒に行っていました。あとは寒稽古の時など、時間が許す限りは剣道部にも顔を出すようにしていました。

【齋藤】今回の研究テーマはどのように決めたのでしょうか？発表の中でも少し話がありましたが、もう少し詳しく聞かせてください。

【廣野】まず、私の所属した研究室はテーマ設定については自由でした。特に研究室の指導教師が行っているものをということは全くなく、自身の興味があることをして構わないというスタンスです。

【齋藤】スポーツ医学には大きく内科と整形外科の分野がありますが、どちらでしたか？

【廣野】私は、指導教師がご自身でも競技をされたり、オリンピックにもチームドクターとして帯同されたりする、整形外科の分野でした。整形外科の分野では、傷害予防をテーマに取り組むことが多いです。私も当初は傷害予防の研究モデル（研究内容発表時に紹介；疫学調査→因子検討→予防手段の提示→介入効果の検討、の流れでスポーツ外傷・障害の予防研究を行う1997年にvan Mechelenらによって示されたモデル）の初めの段階であるスポーツ傷害の発

生状況や発生因子の調査研究を行うおうと考えました。

ただ、月に1回程度開催されていた所属研究室のゼミで、博士論文としての研究の新規性や限られた年限の中で完成させなければならないという現状をふまえると適当ではないという指摘を受けました。そこで研究テーマを再度検討しなければならないとなった際、これまで行ってきたメディカルスタッフやトレーナークリニックの活動経験から筋や腱の硬さというアイデアが浮かびました。大学の卒業論文から大きなテーマとしてきたアキレス腱傷害とつなげたり、ちょうどその時に測定機器が入ったりと色々な要素が重なり合って、今回のテーマにたどり着きました。

【齋藤】剣道ではアキレス腱を切ったり痛めたりしたりする人が多いということですが、先生ご自身も怪我をくり返したり、コンディションを崩されたりというようなすでに入學当初から、怪我に大きな関心がありましたか？トレーナーを志すようになったきっかけを教えてください。

【廣野】それが、あまり剣道が原因での大きな怪我をしたことはありません。大学への進学を考えた際に、将来スポーツ現場に出て感動を味わうような経験をしたいということと、当時の自身の得意なこと、将来的にも続けて取り組むことができそうな好きなことを考えた時に、アスレティックトレーナーという職業を考えました。

【齋藤】イメージとしては、サッカーとか野球とかのトレーナーをイメージして？

【廣野】それも含めて、最初からこれしかないという種目を限定しては考えず、色々な種目を経験し

たうえで可能性について考えてみたいという思いでした。

【齋藤】自身が怪我をしたからというよりかは、将来の仕事として考えて道を選び、その中で自身が実施していた剣道が相まって、現在に繋がっているということでしょうか？

【廣野】はい。日々の活動の積み重ねが現在につながっているかと思っています。

【齋藤】学位取得を目指す中では、どのように勉強を進めましたか？また学位取得によって、自身の道が広がったことがあれば教えてください。

【廣野】月に一回、所属ゼミでの勉強会で、指導教員や他のゼミ生と研究に関するディスカッションを行っていました。また、私の所属していた研究室は少し特殊で、所属ゼミだけでなく同じ領域内での横の繋がりがとても強かったです。色々なゼミを横断しての論文抄読会や勉強会、内科系を含めた様々なゼミの研究会でも出席や発表をさせていただいて、多くの機会を持っていたと思います。また、実際に研究を進める中では、もちろん指導教員からの助言もありましたが、縦のつながりも大きかったと思います。縦のつながりというのは、所属研究室では、大学院に進学したら修士の1年目から、大学生の卒業論文に向けての実験や先輩の研究を、計画を立てて一緒に測定したり、文章を添削したりを手伝うというシステムが確立されていました。そのように実際に測定を行うことでヒントも得て、横と縦のつながりの中で、インプットとアウトプットの両面から研究を進めることができたと思います。

【齋藤】他の研究室でもそうだと思いますが、大学院の先輩が卒業論文を手直して、また博士課程の先輩が修士論文の指導を行うといった流れですね。それと合わせて、トレーナーの活動もされていたと思いますが、そちらは大変ではなかったですか？

【廣野】そちらも大変でした。修士の時は、厳しい剣道の稽古がない分、大学の頃よりは肉体的には辛くはなかったですが、休む間もないといっても過言ではないぐらい勉強しました。色々な研究会以外にも、トレーナーとして活動していたクリニックの勉強会も週に2~3回行っていました。他にもクリニックで担当している選手の怪我について調べたり、トレーニングメニューを計画したりと、大変でしたが生活のほとんどを勉強に当てることができたのは、いい経験であったと思います。

【齋藤】実際にはどんな生活？

【廣野】朝起きて、早朝勉強会があるときは勉強会後に、午後4時頃まで授業に出て、終了後はすぐにクリニックの開室準備をして、選手が来たら評価をしたり、トレーニング指導をしたりして、閉室後はミーティングや勉強会を、お弁当などを食べながら夜まで行って、終わったら勉強会の準備や担当選手のメニュー作り、研究等に関する勉強や授業の課題などをして、夜中に帰って就寝して…を毎日くり返すような生活でした。

【齋藤】トレーナーとして競技現場にも出ていた？

【廣野】フィールドにも出たかったのですが、私が所属していた頃のクリニックは非常に所属人数が少なく、リーダーを行っていた関係もあって基本的にはクリニック

に入り浸っていました。ただ、スポットでは色々な部の大会やイベントへのトレーナー帯同をさせていただいたりはしました、

【齋藤】そんなところで、淀みなく博士論文を提出されたということでは？

【廣野】いえ、そこはなかなか苦労しました。先ほどのキャリアの話とやや関連するのですが、現在の大学に就職できたのには、学位取得に向けた取り組みと大学院の後半での剣道コーチング論研究室の特任助教としての勤務経験が大きく影響していると思いますが、学位取得見込みという形で、実際には学位を取得する前に大学へ就職しました。予備審査も通過しており、あとは投稿中の論文が受理されて本審査を受けるところまでの状態だったのですが、なんとそこで論文がリジェクトされてしまいました。新しい環境で大学での勤務を始めた中での出し直しということで、そこからはやや時間がかかってしまいました。

【齋藤】なかなか難しい部分もあるんですね。さて、今は信州大学の講師という立場で勤務されている傍ら、大学の剣道部の監督としても指導されています、また、全日本の強化訓練講習会でもトレーニングコーチとして活動されています。このように現在されている活動に、学位取得に向けた取り組みは生かされていますか？

【廣野】今回発表させていただいたテーマが直接関わっているとは言えないのですが、勉強を進める中で学んだことや取り組みは、生きていていると思っています。学位論文のテーマは筋肉や腱の硬さに関する内容でしたが、このテーマ設定に至るまで、色々なスポーツ医学に関する勉強をしました。こ

の知識が実際に役立つ場面は多くあります。また、現場においてはなかなか知識だけでは対応できない場面も多くあります。例えば何かうまくいかない選手に対して指導やサポートといったアプローチをする時に、系統立てて考えたり、目標から逆算して計画を立てたりするとといった様々な活動で身についたことは、今でも非常に役に立っていると感じます。あとは、とにかく大学院に進学して広がった、剣道やスポーツ医学の關係に限らない幅広い人脈には、とても助けられていると思います。自分自身で身につけられる技術や知識だけでは限界を感じることも多々あるので。

【齋藤】剣道を指導する際に、自分の専門が生きると感じたことは？

【廣野】やはり、怪我などをしてしまい、稽古ができない期間が生じてしまうのは、とても勿体無いと考えています。その期間に稽古やトレーニングを積むことで、その選手がもっと伸びる可能性もあるわけです。そういった選手のコンディションや稽古量の調整、強度の設定については、気を使っている部分があります。

【齋藤】剣道における自身の分野の今後の可能性について教えてください。また逆にスポーツ医学から剣道に関するアプローチについてもあれば教えてください。

【廣野】剣道とスポーツ医学を考えた時に、今後の可能性は非常に大きいと思います。やはり他の種目と比べると、剣道は遅れている部分があると感じますので、その分の伸び代は大いにあるのではないかと感じています。また、研究面から考えても、系統だった剣道のスポーツ医学的な研究者という

のは、非常に限られていると思います。その面からも非常に組み込みがある、これからの分野かと考えています。

【齋藤】例えば、サッカーでスポーツ医学に取り組むような方は多いけどといったような？

【廣野】そうですね。特に世界規模で考えると、もう全然数が違います。あとは、剣道自体が研究材料として非常に興味深いものであるとも思います。ご高齢の方が量と質の両面でこんなにも運動に取り組まれているというのは、他の種目ではあり得ないような部分ではあります。例えば健康と剣道というキーワードだとか、生涯スポーツ…スポーツというのは適切でないかもしれませんが、生涯をかけて取り組まれる運動とスポーツ医科学というテーマも非常に面白いと感じますし、他の種目では取り組むことの難しいような可能性のある分野かと考えています。

【齋藤】今回のテーマである筋肉の硬さというのも、高齢になると身体は硬くなってくるかと思えますので、もしかしたらどこかで繋がってくるかもしれませんね。

【廣野】はい。その可能性も大いにあると思います。

【齋藤】今回は、武道ワールドの中でお話をさせていただきました。私もいつもここにくると色々なことを考えさせていただきませんが、スポーツ医学に限らず自然科学という研究分野と、科研費の分野という身体教育学と言われますが、武道学といった研究分野の關係について、何かお考えはありますか？

【廣野】私自身は、剣道の競技的な側面のさらに一部分の非常に限定されたテーマで研究を進めています。ただ、実際に大学で剣道の

指導に携わるようになり、大学生への指導だけでなく地域の老若男女剣士との交流や海外での剣道経験といった関わりも通して、競技的な部分だけでは剣道は語れないなということ強く感じるようになりました。具体的にどうすれば良いと言われると非常に難しいのですが、文化としての側面と、競技としての側面と両側から剣道の魅力を検討し、伝えていくことができれば非常に素晴らしいのではないかと思います。

【齋藤】学際的にと言いますか、様々な面から剣道について検討できれば良いですね。ありがとうございました。

さて、せっかくの機会ですので、皆様からも質問を受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか？

【酒井】自然科学の発表を聞くと、研究デザインの仕方がわかりやすく勉強になります。人文科学でもそのような手順を踏んでいきますが、見えにくくなっている場合も多いので。このような機会でも自然科学の研究を聞くことで、改めて研究デザインや手順の踏み方について整理ができる、重要な機会だと思います。

【齋藤】私も逆の立場になりますが、人文科学のお話を伺っていて、先ほどの廣野先生のお話にもありましたが、剣道を取り扱っていて細かい部分の話はできますが、元々の哲学といったところを理解せずに説明していると感じることがあります。このような機会に色々なお話を聞けることは、非常に良い経験だと考えています。他、いかがでしょうか？また、廣野先生から聞いてみたいことなどはありますか？

【廣野】そうですね。本日発表された軽米先生とは、プライベート

ではよく話をさせてもらうのですが、今回研究を改めて聞かせていただいて、とても興味深く感じました。竹刀の長さに関する知見などは、留学生の授業を受け持った時に答えることができるといういなあと感じます。礼法にしてもしかりですが、ただとにかく決まっていることだから守りましょう、ではなく、そのようになっている背景も含めた話ができたら、説得力というか物事の深さに繋がるのではないかと感じ、今日聞いていて非常に勉強になりました。

【齋藤】先ほども少しお話しさせていただきましたが、私も含めて我々は全日本剣道連盟の強化講習会でトレーニングコーチとして活動しています。その中で、剣道連盟のトレーニングコーチには剣道経験者以外は入っていません。なぜかという、剣道経験者以外の人が剣道の世界に入ってきた時に、剣道において大切にしたいところの調整がなかなかうまくいかないと現状があるからです。柔道では、外部からの人材も積極的に登用し、もちろんそれはそれで良い面もあるかと思いますが、例えばウォーミングアップの際に音楽を大きな音で鳴らして、心理的な効果を求めることもある

という話を聞いたことがあります。ただ、剣道としては、静まった中で集中を高め、床を踏む音などで自分自身の気持ちを高めたり、心を整えたりするようなことを大切にしたいという考えがあり、そのような考えを汲み取ってくれる剣道経験者を登用していきたいと考えていただいていると理解しています。それは先ほどのお話にあったような、自然科学と人文科学の融合性というようなところにも繋がってくるのかと思います。

また、剣道の昔からの経験知といったものの中に、運動科学性というものもたくさん入っていることもあり、それを科学的に解明し、わかりやすい形にしていくということも大切なかと考えています。

【大石】最後におっしゃった、先人からの教えを科学的に解明というお話ではないですが、先ほどの話にあった激運動をした際に筋の硬さが減少するということは、ものすごい稽古をした時に力が抜ける様な感覚と似ていて興味深く感じました。研究としては方法が難しい部分もあるかと思いますが、経験からヒントを得て取り組むというのも面白いと思います。

【齋藤】これからはそのようなこともできると面白そうですね。何か課題が1つあった際に、多方面から学際的に取り組むことで、よりクリアに見えるものもあるのではないかと思います。それでは、拍手を持ってこの会を終了したいと思います。本日はありがとうございました。

日時：令和元年6月16日13:00~

場所：筑波大学体育系棟

参加者：酒井利信、大石純子、齋藤実、軽米克尊、廣野準一、大野達哉、二宮恭子、ゴメス・ターニャ、董沢源、田嶋結、杉浦愛理、遅野井匡、日谷太祐（敬称、所属略）

本企画は武道ワールド

(<https://budoworld.taiiku.tsukuba.ac.jp>:代表 酒井利信) の第11回武道ワールド・セミナーにおいて実施したものである。



平成30年度 剣道専門分科会事業報告

1) 総会の開催

平成30年9月5日(水)、東京学芸大学C201において、平成29年度事業報告および平成29年度決算、平成30年度事業計画および平成30年度予算を審議し、承認した。

2) 日本武道学会第51回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で講演会を開催した。

テーマ:「剣道における姿勢の研究とその展開について」

日時:平成30年9月5日(水) 15:00~16:30

場所:東京学芸大学 C201 (C棟2階)

講師:大阪大学 教授 坂東 隆男 氏

司会:香川大学 准教授 宮本 賢作 氏

3) 研究会の開催

平成29年度に延期されていた研究会と平成30年度の研究会を以下の内容で開催した。

平成29年度研究会

テーマ:「江戸時代における撃剣と剣術の相克と融合 ~剣道演武『地稽古』の成立にかかる文献資料からのアプローチ~」

日時:平成30年5月26日(土) 15:00~16:30

場所:明治大学 駿河台キャンパス 研究棟 2階 第9会議室

講師:南山大学 教授 榎本 鐘司 氏

コーディネーター:東京学芸大学 准教授 奥村 基生 氏

平成30年度研究会

テーマ:「術語『budo』『bujutsu』について考える -Donn. F. Draeger の著述・修行を手がかりとして-」

日時:平成31年3月23日(土) 15:30~17:30

場所:明治大学中野キャンパス 高層棟 307教室

コーディネーター:

長尾 進 氏 (剣道専門分科会副会長/明治大学教授)

パネリスト:

Mr. Hunter B. Armstrong (Director, International Hopology Society)

Mr. Phil Relnick (Katori Shinto Ryu Shidosha Menkyo (USA), Jodo 7 Dan Kyoshi)

Mr. Liam Keeley (Okuden mokuroku in Tatsumi ryu Hyoho)

コメンテーター:

酒井 利信 氏 (筑波大学体育系教授)

Alexander Bennett 氏 (関西大学教授)

4) 幹事会の開催 (3回)

下記の日時・場所で、幹事会を3回開催した。

第1回 メール審議 審議期間:平成30年5月18日(金)~23日(水)

平成30年5月26日(明治大学駿河台キャンパス 研究棟 2階 第9会議室)

第2回 平成30年7月14日（明治大学駿河台キャンパス 研究棟 2階 第9会議室）

第3回 平成30年11月10日（明治大学中野キャンパス 6階 第3ゼミ室）

5) **会報『ESPRIT 2018』の発行**

会報『ESPRIT 2018』を、平成30年10月20日付で発行した。

6) **ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営**

ホームページ「KENDO ARCHIVES」(<http://www.budo.ac/kendo/>)を運営した。ホームページにおいて、剣道専門分科会企画、研究会の案内と報告を行った。また、ESPRIT2017を公開した。

7) **会費の徴収**

平成30年度会費2,000円を徴収した。

8) **会員数**

平成31年3月31日現在で、会員数は120名（うち名誉会員8名）となった。

以上

平成30年度 剣道専門分科会 一般会計決算書（平成30年4月1日～令和元年3月31日）

1.収入の部

科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	495,105	495,105	0	平成29年度からの繰越金
2. 特別会計より組入	0	0	0	
3. 会員会費	220,000	204,000	16,000	2,000円×102口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	48,000	23,730	24,270	ホームページ、バナー広告 2,000円/月 29年度分
6. その他	0	10,000	△ 10,000	東京学連剣友連合会より寄付金
7. 利息	0	3	△ 3	
当期収入合計	813,105	782,838	30,267	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	決算額	差異	摘 要
1. 研究助成費	150,000	66,340	83,660	第51回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	10,000	29,395	△ 19,395	東京学連剣友連合会大会への広告(ESPRIT2017特別版提供)
3. 印刷・消耗品費	80,000	83,118	△ 3,118	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	12,129	27,871	郵送料、切手・はがき代等
5. 会議費	20,000	1,886	18,114	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	7,000	73,000	幹事会等交通費
7. 備人費	80,000	39,600	40,400	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	353,105	0	353,105	
9. 次年度繰越し金	0	543,370	△ 543,370	
当期支出合計	813,105	782,838	30,267	

(単位/円)

監査の結果、適正であることを証明いたします。

令和 元年 7月 30日

日本武道学会剣道専門分科会監事

ハネ沢 誠 

川井 良介 

平成30年度 特別会計決算

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)前年度繰越金	511,931	511,931	
2)その他	0	0	
3)利息	0	0	
当期収入合計	511,931	511,931	(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)一般会計へ繰入	0	0	
2)研究助成費	270,000	0	
3)広報活動費	100,000	0	
4)予備費	141,931	0	
当期支出合計	511,931	0	(単位/円)
当期 差し引き残高(繰越金)		511,931	

令和元年度 特別会計予算

1.収入の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)前年度繰越金	511,931		
2)その他	0		
当期収入合計	511,931		(単位/円)
2.支出の部			
科 目	予算額	決算	摘 要
1)一般会計へ繰入	0		
2)研究助成費	270,000		
3)広報活動費	100,000		
4)予備費	141,931		
当期支出合計	511,931		(単位/円)

令和元年度 剣道専門分科会事業計画

1) 総会の開催

下記の日時・場所において総会を開催する。

- 日 時： 令和元年9月6日(金) 14:00 ~ 14:30
場 所： 国学院大学たまプラーザキャンパス 102 教室
議 題： 平成30年度事業報告および平成30年度決算、
令和元年度事業計画および令和元年度予算、ほか

2) 日本武道学会第52回大会における分科会企画講演会の開催

下記の内容で、講演会を開催する。

- 日 時： 令和元年9月6日(金) 14:40~16:30
場 所： 国学院大学たまプラーザキャンパス 102 教室
テーマ： 人口減少時代におけるスポーツ
講 師： 和久貴洋氏(独立行政法人日本スポーツ振興センター情報国際部部長、
国立スポーツ科学センター副センター長)
司 会： 小澤 聡 氏(常磐大学)、齋藤 実 氏(専修大学)

3) 研究会の開催

また令和元年度研究会を以下の日程で実施する。

- 令和元年度研究会
日 時： 令和2年3月21日(土)
場 所： 全国理事会開催会場
テーマ：
講 師： 百鬼 史訓 氏(日本武道学会会長)

4) 幹事会の開催

原則として、本部理事会開催日に幹事会を行う。

(5月、7月、11月、3月)

5) 広報活動の活性化

- ・ホームページによる情報提供を行う。
- ・剣道に関する学術情報の英訳をし、発信する。
- ・他学会及び海外研究機関との交流を活性化する。
- ・東京学連剣友連合会大会において、広報活動を実施する。

6) 会報『ESPRIT 2019』の発行

会報『ESPRIT 2019』を発行する(9月末発行予定)。

7) ホームページ「KENDO ARCHIVES」の運営

ホームページ「KENDO ARCHIVES」(<http://www.budo.ac/kendo/>)を運営する。

8) 会費の徴収

令和元年度会費2,000円を徴収する。

以上

令和元年度 剣道専門分科会 一般会計予算書（平成31年4月1日～令和2年3月31日）

1.収入の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 前年度繰越金	543,370	495,105	48,265	平成30年度からの繰越金
2. 特別会計より組入	0	0	0	
3. 会員会費	220,000	220,000	0	2,000円×110口
4. 本部助成金	50,000	50,000	0	学会本部より助成金
5. 広告収入	48,000	48,000	0	ホームページ、バナー広告 2,000円/月 30、31年度分
6. その他	0	0	0	
7. 利息	0	0	0	
当期収入合計	861,370	813,105	48,265	

(単位/円)

2.支出の部

科 目	予算額	前年度予算額	差異	摘 要
1. 研究助成費	150,000	150,000	0	第51回大会分科会企画、及び研究会の助成金
2. 広報活動費	30,000	10,000	20,000	恒常的広報活動への助成、東京学連剣友連合会大会における広報活動
3. 印刷・消耗品費	80,000	80,000	0	会報印刷代、事務用品等
4. 通信費	40,000	40,000	0	郵送料、切手・はがき代等
5. 会議費	20,000	20,000	0	幹事会等会議費
6. 交通費	80,000	80,000	0	幹事会等交通費
7. 傭人費	80,000	80,000	0	事務局および広報活動におけるアルバイト
8. 予備費	381,370	353,105	28,265	
当期支出合計	861,370	813,105	48,265	

(単位/円)

事務局だより

会員の皆様におかれましては、平素より剣道専門分科会の運営にあたり格別のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。ここに剣道専門分科会会報ESPRIT2019を送付させていただくことができました。今回掲載させていただきました研究会は、剣道をこれまでになかった視点から捉えた国際フォーラムであり、本分科会に新たな視座を提供してくださいました。また、若手研究者の動向では、自然科学系の分野から剣道の障害に関する研究を進めている先生をご紹介させていただきました。これからも学際的視点から本誌より情報提供ができればと思っております。引き続きのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

平成11年（1999）に発足した剣道専門分科会は、本年度で20年目の節目を迎えております。3月に予定されています本年度の剣道専門分科会研究会では、日本武道学会の運営へのもちろん、本会の立ち上げにご尽力された百鬼史訓日本武道学会会長をお招きします。百鬼先生からは、これまでに自然科学系の分野から進められてきた研究の総括などをお話いただく予定です。2020年3月21日（土）の開催で計画させていただきますので、ぜひスケジューラーに日程をご入力いただきたく存じます。皆様にご参加をいただければ幸甚です。

末筆ではございますが、皆様のご健勝とますますのご活躍をお祈り申し上げるとともに、本会に対して更なるご指導ご協力をいただければ幸甚です。

事務局長

齋藤 実（専修大学）

剣道専門分科会会報 ESPRIT 編集委員

湯浅	晃
長尾	進
数馬	広二
酒井	利信
齋藤	実
奥村	基生
川井	良介



日本武道学会剣道専門分科会事務局

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

専修大学スポーツ研究所 気付

E-Mail: saitomakoto@me.com